

梁朝社会下の庾信

はじめに

庾信は、文学史的に見て、六朝末における古典文学の集大成者として、また唐の杜甫に強い影響を与えた詩人として、きわめて重要でありながら、その厚い典故の壁に障られて、今日まで研究が遅れた人物だと思われる。しかし、興膳宏氏の『庾信』が世に出るに及び、ようやくそのまとまった内容が知られるようになった。⁽¹⁾氏の『庾信』の特色は、彼を、北遷後に故郷の江南を追懐するすぐれた文学作品を、数多く残した詩人として取り上げた点にあると思われる。

そこで、小論では視点を梁代に据え、梁朝社会下の庾信の足跡を可能な限りたどり、その上で侯景の乱前Ⅱ栄光の時期と、乱後Ⅱ苦難の時期とに分ち、各々の彼の現実認識を探ってみようと思う。それを通して、庾信が六朝という歴史の変動期の中で、「宮体詩」の本質といかに関わりの、さらに国家の滅亡の下で、その文学をいかなる方向へと変質させていったのか。また、「哀江南賦」の作品のテーマ、制作の意図・時期、及びそれに付随する幾つかの問題について、聊かのことを申し述べたい。

と思う。

一 栄光の詩人

庾信の少年期は、まさに梁の最盛期だった。外国の使節も頻繁に来訪してきた。「哀江南賦」にはこの頃を追懐して、「西よりの費は浮玉南よりの琛は没羽」(「一一・一」⁽²⁾)と歌われる。たとえば庾信五才(天監十六年)の時には、婆利国の使者が来て、梁の仏教の盛んなこと、都の人々の麗わしいこと、法律が整備され、学問に熱心であること等を賛美している(『梁書』卷五十四 諸夷)。その翌年には、干陀利国の使者がきて、「国土は安楽にして諸々の患難はなく、人民は私善し……」(同前)と絶賛したほどだった。武帝の大々的な文化事業も、随所に大輪の花を咲かせ、人々を陶醉させていた。その頂点にあるのが、ほかならぬ武帝その人である。天監十七年には、武帝所製の賦に、周捨が勅を奉じて注を付している(『梁書』『南史』周興嗣伝)。このような時代の到来に、貴族達は沸き立ち、無上の栄誉を得るべく、その才能を競いあったのである。

加藤 国安

(漢文学研究室)

五二〇年、年号が「普通」と改まる。庾信八才。普通年間の初め、貴族達の耳目を引く出来事があった。これまで相互に角逐を繰り返してきた北魏と初めて和議となり、その使節の一行が梁を訪れ、中書舎人朱异を接待役とする梁側の酒宴に臨んだのである。その時北魏の使者は、経史の学を遍ねく披露し、「南国の弁学」を嘲った。しかし、梁朝の代表王錫と張纘が問髪を入れず、それに応酬したため、北の使者はいたく感服し、両手を前に組んで佗びたという（『梁書』『南史』王錫・張纘伝）。

このような文人貴族の華々しい活躍は、天下に大いに喧伝されたことと思われるが、おそらく庾肩吾・信父子の耳にも入っていたのではないかと。そして、それを自己の大いなる可能性として、夢見ることもあったのではないか。この二十五年後に、庾信は北朝への外交使節副使の榮に与かっている。が、その時には梁朝に翳りが見え始め、険しい時局の下で晴れがましさのみというわけにはいなくなっていた。

この頃雍州刺史として地方府にあった晉安王綱も、また大々的に文学事業を開始している。普通四（五二三）年頃、類書『法宝聯璧』の編纂に着手、この撰者（計三十八名）には、多数の顯貴に雜り、父の庾肩吾も連なっていた。また、これとは別に、この頃晉安王の命を受け、劉孝威・江伯搖・孔敬通・申子悦・徐防・徐摛・王囿・孔鑠・鮑至と庾肩吾の十人が、「高齋学士」と号して、「衆籍を抄撰」する仕事にも携わっていた。普通四年の時、肩吾は三十七才、官職は記室参军（第六班）、貴族としては低い身分である。庾信は十一才だった。この聡明な少年は、父を誇りに感じながらも、さらに高い栄光をめざして、文学修業に精励していたに違いない。

当時、庾信がどのような形で学問を修めていたのか、よくは分からない。通常、名門貴族の子弟は国子生となって国子学に入り、国子博士や国子助教等について学び、後に「射策」、即ち官吏登用試験を受け、合

格すると家格に応じて起家する。⁽⁴⁾これが当時の正統なエリート・コースだが、庾信の勉学の過程は定かでない。が、「射策」合格に関連する資料としては、

王子、洛に浜するの歳、蘭成（庾信の小字か）、射策の年。（哀江南賦 一〇八・二）

（庾信）年十五にて、梁の東宮の講読に侍る。桓麟、十四の歳に宿客の詩に答え、（戦国斉の）魯連、十二の年に堅離の弁を杜ぐと雖も、或いは斯れ尚お同日に語るに匪ず。（庾信）玉墀に射策し、高等に甲科たり。公孫（弘）の金馬の時、（董）仲舒の鴻漸の日というも、未だ類に連なるあたわず。曾て何ぞ云うに足らん。（滕王迪原序）

等がある。これによれば、庾信は大通元（五二七）年、十五才の時に昭明太子の侍講となり、「射策」にも合格したことになる。これまでの猛勉強が実り、皇太子の侍講に上げられたのだから、庾信父子の喜びや推して知るべしである。そして庾信はこの榮譽を全身に感じながら、昭明太子所蔵の有名な三万巻の図書を、一層の熱心さで読み耽ったに違いない。「信は幼にして俊邁、聡敏なること絶倫」（『周書』庾信伝）と記される豊かな天稟と、「強記独り絶し、博物群せず」（滕王迪原序）という拔群の記憶力と博学さは、愈々庾信の読書欲をかき立てたと思われる。彼は恵まれた文学的環境の中で、「倦まず努力を続け、その読書範囲は礼・詩に始まり、万巻百家の説、その他金匱玉版から魯壁魏墳の書まで、古今のありとあらゆる書を含み、しかもその字句の隅々まで窮め、その篇簡を誦せざるはなかった」（同上）というすさまじい勉学を、以後の東宮時代を通して積み重ねていったと考えられる。

しかし、国内は全く太平な世というわけではなかった。北伐も北魏の内乱に乗じて再開された。即ち、大通の初め、襄陽の晉安王は部下の柳

津・董當門・杜懷宝・曹義宗等を率い、北魏に攻め入っている（『梁書』『南史』簡文紀）。この折の軍書は多く徐摛の手より出た（『梁書』『南史』徐摛伝）というから、後述するように彼のその他の言動からして、徐摛は単なる「宮体詩人」というわけではなかったようだ。それはともかくとして、雍州軍府は有事の際には、北朝に近いため重要な前進基地となる。いざ北伐ともなれば、諸有力者の力を結集せねばならない。たとえ中央より多額の軍資金が投入されようと、北伐も度重なれば厭戦感も昂じてこよう。それを吞んでもらうために、見返りとしての恩典の供与が様々な形ではかれたことだろう。今、晉安王の幕僚の文を見ると（『全梁文』卷六〇～六一）、王からの下賜品に対する感謝の啓が少なからず見られる。

劉孝綽「謝晉安王餉米酒等啓」

劉潛「謝晉安王賜銀裝絲帶啓」

「謝晉安王賜宜城酒啓」

「謝晉安王賚蝦蟇啓」

「謝晉安王賜甘啓」

劉孝威「婚謝晉安王賜錢啓」

よく知られていることだが、当時、二品清官に相当する高等武官と文官には、関市の税をかけぬという恩典が与えられていた。⁽⁵⁾ 右の下賜品も、本質的にはこの種の恩典と変わりはあるまい。つまり政治的に最大の不安要因である北朝との対立関係の下で、これら名声ある有力者の協力は不可欠であり、国内の体制の維持・強化の上に寄与する目的をもって、これらの種々の恩典はあったと思われる。とはいえ、このような一部の特権階級の甘い利権的体質は、社会の下部に向かって次々に悪弊を生む結果となった。そして次第に道義の乱れがひどくなり、官僚の腐敗、甚だしい奢侈や蓄妾の弊害などが問題視されるに至るのである。

昭明太子はこのような国家の現状を憂え、中大通二（五三〇）年上奏文を出している。それはかつての郭祖深の危惧（73頁参照）が、ついに国政の最高部にまで広がってきたことを物語ろう。

未だ萌さず覬難きも、竊かに愚懐すること有り。聞く所では、呉興は累年収を失い、民は頗る流移す。呉郡の十城亦た全て熟さず。唯だ義興のみ去秋は稔り有り。…穀稼は猶お貴きがごとく、劫盜は屢々起るも、在所の有司皆は聞奏せず。…去年称して豊歳と為すも、公私未だ食うこと足る能わず。如し復た今茲業を失えば、弊を為すこと更に深きを慮^{おそ}る。…若し善人のみ役に従わば、則ち抄盜弥々増えん。（『梁書』昭明太子伝）

太平の世を一片剥けば、農民の減少・穀物の不作とその高騰・盜賊の多発等々、真に深刻な問題を萌しつつあったのである。

中大通三（五三一）年、庾信十九才。この年、帝室に重大な変化が起きた。梁朝の行末を深く心配した昭明太子が四月に急逝し、新皇太子に晉安王が決定したのである。晉安王は地方軍府の側近を率いて東宮入りし、早速謹嚴だった兄の文学との差を意識してであろう、積極的に艷情詩を推進した。その中心人物は無論、徐摛と庾肩吾だった。以来、春坊を上げてこれに倣い、「宮体詩」の名が与えられるようになったことは、つとに知られる通りである。

では、この「宮体詩」の推進の背景は、何処に求められるのだろうか。従来は一般に、兄昭明太子亡き後、空白状態となった文学界に新しい文学を興こし、さらには文学の潮流を自分達の手で変革したいという野望を、新太子が持っていたからだ、と説明されてきたように思う。確かに文学論としてはその通りだと思いが、ただこれだけでは問題の全面解決とはなるまい。晉安王綱が芸術至上主義者ながらも、政治の執務には極めて謹直な人物だったことは、しばしば指摘される所である。たとえば

王自身、「立身の道は文章とは異なる。立身は先ず須らく謹重にすべし」(誠当陽公大心書)「山涛言える有り、東宮は徳を養うのみと。但し今と古とは殊なる。時に監撫の務め有り。竟に邪を黜(しりぞ)け善を進む能わず。聖政を仰ぎ裨(おきな)わんとするも、此を以て慙惶す」(答徐摛書)ともに『全梁文』巻十二と、自ら述べる通りである。その晉安王及び側近達が、国内の様々な政治問題を顧慮することなく、自由かつ純粹に「放蕩の文学」を謳歌したとは考え難い。極めて道德的姿勢の濃い兄の文学的立場から、敢て社会の衰退に繋りかねない艷情の文学へと急転回したのには、何か理由があつたことなのではないか。

ここで、例の徐摛の武帝への「宮体詩」の弁明を想起してみよう。人一倍経世済民への熱情を抱く武帝は、この「宮体詩」の政治的影響を強く懸念したからこそ、徐摛を呼びつけて叱責したのだと思われる。しかし徐摛は、芸術至上主義とはいえ、そのみを前面に押し出しているわけではなく、各方面の文化を網羅し、それらとの均衡の上に立とうとしているのだという姿勢を示す。武帝はその徐摛の豊かな学殖に感嘆し、「宮体詩」を改めて総合的文化事業の一策として位置づけたかに思われる。かくして武帝はこれを承認するのだが、そうだとすると、艷情詩の頹廢美の社会的弊害は免れるものではない。この承認の背景には、歴史の表面には現われない、何か政治的配慮が働いていたのではないか。矛盾の噴出する当時の社会状況について、賀琛はその上奏文で次のように訴える。

歌姬舞女には本より品制有り、…今、妓を蓄うるの夫、等秩あるなし。復た庶賤微人(しりぞ)と雖も、皆な姬姜(きしやう)を盛んにし、務めては貧汚に在りて、争いて羅綺を飾る。故に吏の民を牧するを為すは、競いて剥削を為し、貲巨億と雖も、罷め帰るの日より数年を支えずして、便ち已に消散す。…刑役(しんぎやく)に起こり、民力彫み流る。今、魏氏と和

親し疆場(国境)に警無きも、若し此の時に及びて大いに四民を息ませ、之をして生聚し、国費を減省し、府庫をして蓄積せしめずんば、一旦異境に虜れ有り、関河掃う可きのときは、則ち国弊れ民疲れ、安んぞ能く其の遠略を振わんや。(『梁書』巻三十八 賀琛伝)

即ち、太平の世とは見かけばかりの病める社会であり、このまま放置すれば国家滅亡の恐れすらなしとはいえない状態にあったのである。このような矛盾の拡大化につれ、朝廷が最も警戒すべきは、身分の固定的な社会下にあつて、恒常的に現状への不満を抱く寒人層(たとえば右文中の「庶賤微人」の有力者達)の動向であらう。したがって朝廷としては、彼等の盛んな抬頭をあくまでも社会の動揺の本と見なし、梁朝の基本的体制である、皇帝Ⅱ貴族の一枚岩的な新貴族主義体制を貫徹しようとしたに違いない。このような中で新太子側は、困難な問題に対応するには、もはや抽象論では片付かず、今後はより現実に沿った柔軟な施策が必要だ、と考えていたと思われる。そのためにはこれまで以上の貴族との連帯感が不可欠であり、その具体的方法として考えられたのが、皇帝Ⅱ貴族が既得した社会的地歩を基盤に、この上もなく優雅で、魅惑的な美Ⅱ文化の創造者・享受者となり、これに国家的な権威を付して、自他を峻別しようというものだった、と考えられる。いわば体制側の最も誇るべき華麗な文化を見せつけ、蓄積の浅い新興勢力との差を示すことで、現体制の崩壊を何とかして防ぎ止めようとしたのではないか。即ち、梁朝の基軸である皇帝Ⅱ貴族の連帯の一層の強化のシンボルとして、また実力派寒人層の盛んな活動への牽制として、この「宮体詩」は取り上げられたように私には思われる。

以上のように考える時、新太子の芸術至上主義も、徐摛の文学も、政治を謹厳に見つめてのことだと解される。梁の武帝もおそらくそう政治への効果を読み取ればこそ、これを容認し、ひいては武帝自身を初めと

して、梁朝の顯貴等も大手を振って、この文学の潮流に乗り、『玉台新詠』にも堂々とその名を連ねることができたのだ、と思われる。しかし、この「宮体詩」推進のさらに奥には、皇帝・貴族による特権的利益の保持の欲求と根本で繋がっていたから、結局、国家体制を維持するどころか、彼等の対社会的主義・倫理の実践はますます矛盾をきたし、一層の社会の腐敗・墮落を引き起こす結果となる。そして梁朝社会の不合理性は、愈々誰の目にも明らかとなってくるのである。

実務派貴族の徐摛は、次第に矛盾を露呈し出した今日の事態に、無関心ではいられなかったのだろう。政治に深入りし始め、実務面を取りし切っていた朱异との対立を深め、ついに地方に遠去けられることになる。文学の臣が実務に口出しすれば、これまでここに強大な既得権を張ってきた官人側の反感を買うのは必定だった。しかし皮肉にも、庾肩吾の方は純粹の文人肌だったため（72頁参照）、そのまま東宮に残り、中子庶人となっている。また庾信も東宮学士に選ばれ、父子揃ってのご恩顧はまことに人も羨むばかりだった。庾信はこの頃の充実した日々を、後年追想して次のように歌っている。

年少にもかかわらず 東宮の顧問を忝けなくし

また高官を濫りにした

緑つややかな槐は 学士にその葉を垂れ

長い楊の木は 宿直の館にその光を映じていた

（奉和永豐殿下言志十首 其八）

昔 草莽の臣なのに 禄位を濫りにした

それはまるで 『易』にいう「慶餘」のよう

わが庾家には 鄭玄のごとき秀れた人物が出で

また帝室より下賜された蔵書があった

梁の太平の世には

皇族に陪してあちこちと遊び回ったもの
帝が祭祀を行われる時も間近に侍り
宿直の日には

揚雄のごとく詩賦を作り楽しんだもの

（小園賦）

初めて建礼門に香り高き尚書郎となり

ついで崇賢門に青雲の志を抱く東宮学士となった

そして威嚴ある皇太子の講席に侍り

光り輝く公卿の子弟の座に 伴読として連なった

が 己の才は瓠で海水を汲み

管で天を窺う浅薄さ

皇宮の堤の水は白く

丸い池は釣を楽しむことができた

時には 軍幕に近侍したり

時には 琴の演奏を聴いたりした

門前のわが名札を示せば 宮中に自由に出入りでき

ついに文臣に加えて 春宮の兵馬節度ともなった

（哀江南賦 一〇八・一一三）

徐摛を欠いた中央文壇に、庾父子は大いにその名を揚げたことだろう。

『玉台新詠』には、多くの顯貴とともに、父肩吾の作品も相当数録され、庾信自身の作も四首ながら録されている。徐摛の作品は、左遷のためと思われるが一首も載せられていない。庾信はまたこの頃、「春賦」「燈賦」「対燭賦」「鏡賦」等の、「宮体詩」風の艶麗な賦も書いている。このような父子揃っての盛んな活躍に対してであろう。東宮より庾肩吾に様々な下賜品が与えられており、庾肩吾の文集には各々についての感謝の啓が録されている（『全梁文』巻六十六）。

「謝東宮賜宅啓」

「謝東宮古迹啓」

「謝東宮寶内人春衣啓」

「謝東宮寶米啓」

「謝東宮寶栗啓」

「謝東宮寶檳榔啓」

庾父子が東宮の恩顧を深く蒙るにつれ、父子の梁朝への感恩の情も愈々深まっていったに相違ない。そして自らの文学を、今日の国家の体制に政治的に寄与するためと位置づけていたように思われる。庾信の「宮体詩」は、梁の皇帝Ⅱ貴族の体制に、周囲と協調しつつ積極的に参与し、これを支えんとする姿勢から生まれていると考えられる。後年の「哀江南賦」「擬詠懷詩」「擬演珠」等のあの敵しい梁朝批判も、この帝室への深い愛情なしには考えられない。

庾信の生涯の中では、この頃が輝かしい栄光に包まれて、最も幸福な時期だったといえる。梁朝が殷賑な極盛を示したのはこのあたりまでで、大同年間に入ると、国内に不気味な震動が散発し、時代は次第に険しい空気を含みながら、頹廃と爛熟の気配を漂わせ始める。侯景の乱自体は突然勃発したもののだが、しかし、梁朝の陰翳は濃くなる一方だったのである。

二 激動の始まり

この章では、幸福の絶頂期を過ぎた庾信が、その後の梁朝の苦難の歩みをどのように見たか、侯景の乱に至る以前の状況を通して探ってみよう。

大同元（五三五）年頃、肩吾が安西湘東王録事参军となり、一時中央の政界から離れることとなった。それが単なる転任なのか、徐摘のよう

に実務派官僚に忌まれてなのか。それとも何らかの事由による帰郷（江陵は庾氏の郷里になる）なのか、理由は定かでない。ともかく、庾肩吾は湘東王繹の江陵府に仕え、ここでも王の寵愛を受け、様々な下賜品を賜わっている。こうしている間にも、世は徐々に翳りを帯びつつあった。前述した賀琛の武帝への上奏文は、大同五（五四〇）年のことになる。ちょうどこの頃、庾肩吾は再び東宮に帰り咲き、舎人となっている。当時、政治の実務はほとんどこの東宮に任されており、中でも殷不害が武帝の信任ことに篤かった。庾肩吾も殷不害とともに、東宮に当直して実務に当たったりした。しかし、ある時武帝は肩吾に、「そちは文学の士であり、実務はそちの長ずる所ではない。どうして殷不害を来させないのか」と述べている（『南史』『陳書』殷不害伝）。庾肩吾が不得手な実務に敢て関わりうとしたのは、到底野心があつてのこととは思えない。徐摘の先例も十分承知の上で、今日の政治状況にもはや着却し得ぬものを、感じ取っていたためだと考えられる。

『梁書』『南史』の武帝本紀を見ると、この頃国内の各地で暴動が起こっている。中大通二（五三〇）年には、会稽郡に山賊が集結し、同三年には、前梁山県侯蕭正則が広州に反し、さらに大同七（五四一）年には、交州人の李賁が反し、同十年に僭号して年号を天徳と改めている。李賁が鎮圧されたのは、中大同元（五四六）年のことである。また大同十（五四四）年五月には、広州人の盧子略が反し、討伐されている。もはや食えなくなった民衆は流民となり、ついに暴徒と化し、各地で暴れ回ったのである。

庾信も郢州別駕の任にあった大同八年（信、三十才）に、直接内乱を経験している。安城人の劉敬宮（敬躬とも記す）が仲間を集め、数万の集団と化し、付近の城々を襲撃したのである。そこで江州刺史湘東王繹は、曹子郢・王僧辯・張綰等に命じて叛乱軍を討伐させた（『梁書』『南

史』武紀、同・張綰伝、『南史』王僧辯伝。その折、庾信も湘東王へ策を上申し、大いに手柄を立てたという。「滕王逵原序」はその模様を、「叛乱軍は庾信の名徳を聞いただけで恐れ退却し、後に庾信は武帝のお賞めに与かった」と伝えている。また「哀江南賦」(二〇九・一一)に、

論兵於江漢之君 兵を江漢の君に論じ

拭玉於西河之主 玉を西河の主に拭う

と歌うのも、この折の水戦を指している。世の不穏な動向につれて、栄光の宮廷詩人は次第に、現実社会の矛盾に直接触れ、真剣な目を向けざるを得なくなつてゆくのである。

国内の騷擾は徐々に不気味な広がりを見せてゆく。そしていつしか無数の渦を集め、巨大な渦ができ上がる。その重要な一因に、官吏の甚しい悪事・不正が挙げられねばならぬ。その最たる例は、ほかならぬ梁の諸王子達だった。しかし武帝は彼等の勝手気侷な振舞を見て、厳罰を下せなかった。法律は皇族や上流貴族にあつては、無いのも同然だった。さらに経済政策の破綻、及びそれに便乗した悪徳商人の跋扈も甚しかった。このような混乱の背景には、武帝が士人の経済活動を肯定し、官僚としての不正に甘い認識しか持つていなかったこと、また皇族の商行為に寛大で、その蓄財がたとえ不正手段によつて得たものでも、殆ど問題としなかったらしいことが、史家により指摘されている。百官にしても公務に励む者は少なく、ただ禄のみ食ふ利益を競い、財貨を積み重ねるばかりだった。州郡の長は人民を治める道を思わずに、貪欲残忍をもつて善良な人々を脅し、その害は豺狼よりも甚しかった。ことにひどかったのは征役の兵を募る方法で、それは悪辣を極めたものだった。こともあろうに、戦場で倒れた者の名前を脱走者名簿に載せ、その身代わりに家の丁男を引き立て、もし一家が逃げれば、同籍の者を引き立て、それも逃げれば近所から引き立て、それも逃げれば村から引き立てた。こう

して全村が空になってしまうこともあったという(『南史』卷七十 郭祖深伝)。梁朝の繁栄も裏を返せば、世を挙げての虚偽の栄えだったやうだ。

しかし、武帝も懸命の防禦策を打ち出してはいた。『梁書』武帝本紀を見ると、大同七(五四一)年正月に、流民に各々の田宅へ戻るよう呼びかけ(毎度のことで実効のほどは疑問)、十一月には詔して、「聞く所では、この頃富貴の者のみが公田を占有し、時政を害すること甚だしい。これより公田はすべては富貴の者には貸し与えぬこととする。」と声明する。しかし、すぐその後で、「すでに借りている者は特に追求せず、また貧民への援助をしている者もこの限りではない」と後退し、不徹底に終わっている。さらに十二月になると、「今日、良才の役人は少なく、暴虎となつて威を振っている。何事につけ誅求は激しく、暴行掠奪も多く、このままでは良人は命尽き、富豪までが財尽きてしまおう」と、深刻な事態はその度を増し加えつつあった。朝廷は憂世の情を濃くしつつも、有効な手立てを講じられずに、仏教に救いを求めるよりなくなつてゆく。地震も京師を中心に、ほとんど毎年のように起きていた。『隋書』五行志下を主に、『梁書』武紀を加えて地震の記録を列挙すると、中大通五年正月戊申(百姓、饑饉に苦しむ)・大同二年十一月辛亥・同三年十月丙辰(会稽に賊起る)・同七年二月己卯(交州人李賁反す)・同九年閏正月(李賁、皇帝を自称す)。梁朝の人々は、この災異と地上の苦難の連関を通して、世界の調和・秩序のどこかが狂い始めたことを、はつきり認識せざるを得なかった。それを何とか修復しようとしてに相違ない。大同十年には「新曆」を制定したが、しかし、実施する機会もないままに、ついに侯景の乱が起きてしまうのである。

大同十一(五四三)年、庾信三十三才。梁は徐君房を正使、庾信を副使(通直散騎常侍)とする使節を、東魏へ派遣する。そもそもこの通和

の背景には、国力の衰退化につれて、和議を結び当面の時局を乗り切らざるを得ぬ、梁側の内実が相当に絡んだものだったろう。これまでの梁は十分な国力を背景に、さらに北魏に吹き荒れた大動乱の嵐に乗じて、断続的な北伐を繰り返す余裕があった。しかし、中大通六（五三四）年、北魏が東魏と西魏に分裂し、第二の三国時代に入ると、梁の対外政策は甚だ不透明なものとならずにはおかなかった。こうして梁は、大同二年以後、東魏との外交関係に努め、国境線の守備を軽減し、自国の政治的安定に懸命となったのである。かつてであれば、梁朝を代表する使節に選ばれることは、華やかな脚光を集めたるうが、今や使節の任務は複雑な国際情勢を睨んでの梁朝の威信をかけたものとなり、極度の緊張と重圧を強いられる性質にと変わった。その厳しい精神状態は、当時の庾信の作品に如実に表われている通りである。

ところで、庾信はこの折、北魏の分裂とその下でのわが身の傷ましき運命を哀しむ北朝の文学に触れ、それが後の「哀江南賦」の基礎になっているのではないか、という見解を、近年アメリカのグラハム氏が提示しておられる。が、グラハム氏は、「哀江南賦」と李諧の「述身賦」・李騫の「積情賦」との関連を簡単に指摘されたのみで、それ以上の詳しい考察をされていない。そこで、本論ではもう少しこの説を検討してみたい。

まず、李諧の場合から見よう（『魏書』『北史』孝静帝本紀・李諧伝）。李諧は北魏末の動乱の中で、孝荘帝の永安二（五二九）年五月に入洛した北海王元顥の属臣となった。が、結局、北海王は孝荘帝と爾朱榮に敗られ、七月に首斬られてしまう。この急転する時局の下で、「述身賦」は著わされた。

運道の將に季ならんとするに属し、冠屨の礙る無きを諒す。（天子の）奄に鼎湖に昇御されるや、忽ち哀しみ四海に流る。昔、漢の命

の中に微えしより、皇統、是れまで三たび絶す。孝昌（北魏・孝明帝末の年号、五二五）の陵陂（混乱）に暨び、亦た継□して禍い結ぶ。將に小雅の詩廢れ、復た三綱の道滅ぶ。（わが）思いは時の昏きに踟躕し、独り運の閉づるに沈吟す。遂に窮里に退処し、人世と外交せず。…何ぞ古今の一揆、毎に治まること少くして、乱れることのみ多き。

『魏書』卷六十五 李諧伝

暗雲の閉ざす時勢下に奔弄される自身の不遇を嘆き、以後は退隠し世と交りを断たんとする思いを、苦渋に満ちた言辞で歌っている。

この賦が書かれてまもなく、世は北魏から東魏へと移り、孝静帝の治下に入る。その初めの天平四（五三七）年秋七月甲辰に、李諧は正使として、副使の盧元明・李鄴を従がえ、梁を訪問する。その折の接見の様子は、『北史』卷四十三李諧伝に詳しく、梁の武帝が李諧の豊かな才弁に、いたく感心したことを伝えている。じつは、東魏側はこの度の訪梁団の正使の人選に、盛んな朝議を重ねており、李諧は文字通り第一級の人物だったといえる。その折李諧の力量を彼等に知らしめたものといえ、やはり右の「述身賦」だったに違いない。李諧の訪梁時の時にも、「述身賦」のことは当然知られていたはずだし、この時庾信は「述身賦」に接したかもしれない。また、五四三年に庾信が東魏を訪問した折にも、北朝文化に直接触れる中で、改めて「述身賦」に接する機会を持ったかもしれない。庾信はこれらの期間のどこかで、「述身賦」を読み、その内容を早速吸収したのではないかと推測される。

次に、李騫の場合を見てみよう（『魏書』李騫伝）。彼も北魏末の動乱下に、憂世の情を「積情賦」に綴っている。

孝荘（北魏末動乱下の皇帝）の入統するに速び、乃ち道喪われ時昏し。水は溟海に群飛し（天下争乱時の水戦の喩え）、火は中原に載燎すれ

ば、膠の船を延べて水を越え、朽ち索の若きをもつて乗り奔る。玉羊（世界が調和している時に現われる瑞祥）は失われ御する無く、金雞（天上に住むという鳥）は亡びて存せず。天歩は其の多難を忽にし、横流且に其れ云に始まる。既に雲擾ぎ海沸き、亦た岳立ち基峙たつ。三綱の日々に紊れるを睨、四維（國家を維持するのに必要な礼・義・廉・恥の四つの道義）の理わざるを見ゆ。（『魏書』卷三十六 李騫伝）

と、孝莊帝治下の道義の無さ・政治の腐敗・世界の秩序の混乱などを慨嘆している。グラハム氏は、「述身賦」「積情賦」と「哀江南賦」の間に、表現上の類似はないとされるが、右の文中の傍線部は、「哀江南賦」の、「漬ぎる水に乗ずるに膠の船を以ってし、奔れ駒を馭するに朽ち索を以つてす。小人は將に水火に及び、君子も則ち方に猿鶴と成る」（一一四・一二三）の表現と、よく類似しよう。

ところで『魏書』李騫伝には、彼が後に正使として梁國を訪問した（いつかは不明）と録しており、当時、外交の場で文化交流が行われるのは通例だったことからして、その折に「積情賦」が梁朝の人士間に話題になったことは、十分に考えられよう。当時、南北間で文化交流の少なくなかったことは、庾信が東魏を訪問した翌年、今度は東魏の訪梁団を迎えて文学談義をした中で、庾信が北朝の代表的な文人温子昇・魏収の作品を見ての感想を話していることから伺える。加うるに、李騫は魏収・盧元明と親友だったと『魏書』李騫伝に見えており、彼が北朝を代表する文人の一人として、梁朝にその名を揚げていたことが想像される。このように見てくるならば、庾信が「述身賦」「積情賦」を読んでいた可能性は大いにある。そして後年、自らも亡国の悲哀を綴らねばならなくなつた時、庾信はこの中篇の二賦を意識し、江南貴族の面目にかけて、これらに劣らぬ大作をと努めたものではなかったか。

外交上の功績が認められてに違いない。庾信は、中大同元（五四六）

年、建康令に任ぜられる。が、建康令に就任後の庾信の生涯は、梁朝の存立を脅かすような事態が次々と押し寄せてくる中で、俄かに苦難の道を転がり始める。庾信はこの頃を回想し、

武帝は司牧となつて 百姓の命を預り
世を厭うに及ぶや 天下の人心を消耗させた
一頭の馬が奔れば すべてが動き出し
一艘の舟が転覆すると 一切が沈んでしまった

（擬演珠 其十九）

後漢の馬武は匈奴への出撃を上疏したが
梁はそのような相談に与かることもなく
また後漢の馮唐は將軍論をぶつたが

梁は軍隊について論じることなど余りなかった

これではどうして 知らぬ間に

山岳が燃え上がり

江湖の沸き上がろうと それに気づこう

（哀江南賦 一一一・三三四）

武帝は仏学の中に耽溺し

軍備を怠り 城を危うきままにし

行軍の用具は寝かせたまま

良き軍馬も絆いだままだった

（同 一一三・一〇一一四・一）

と、梁滅亡の究極の原因、それは政務に倦んだ晩年の武帝自身にある、と表明する。かつて帝室に寵愛された宮廷詩人とは思えぬ、憚りのない口吻であるが、これは梁朝を深く愛するがゆえにこそ、同根の傷むのを強く覚え、その鋭敏な感受性で、祖国の呻きを全身で感じ取っていたことを示すものに他なるまい。

三 建康の陥落―悲慘の中で

眼前の恐ろしい光景のほとんどが、庾信には忽ち古典中の様々な故事と連結して扱えられたのではないか。「哀江南賦」の多量の典故を前にする時、そのような感に打たれざるを得ない。あわせて、古今を貫く言語を紹介して、過去の歴史との危険な符合が、当時の状況の容易ならざることを、一層深く彼に認識させ、庾信の現実感覚をより厳しく、より不安な方向へと導いていったろうことも推測される。「哀江南賦」を読むと、彼が昂ぶる感情の連続の中で、現実の流れの一齣一齣を、鮮やかに刻印していたことが伺える。庾信はその詳細な梁の盛衰史と自己の生涯を、六朝の華麗な「賦」の文学の遺産の上に、まことに該博な古典の教養を駆使して、長編の現実主義的かつ悲愁・慷慨の文学へと仕立て上げている。「哀江南賦」の叙述におけるこの逐一性・全体性は、同様に梁朝の滅亡を詠じた、かの顔之推の「観我生賦」や沈炯の「帰魂賦」、あるいは前述した北朝の「述身賦」「积情賦」には見られぬものである。そこに、「哀江南賦」の重要な一特徴があるといえよう。以下、「哀江南賦」の叙述に沿って、庾信が梁朝の滅亡をどのように扱えたのか、また、彼がこの悲劇に何を感じ取っていたのか、等について検討してゆくことにしたい。

侯景は東魏の高歓の下で、河南に兵十万を擁していたが、太清元（五四七）年正月八日、高歓が没すると、河南に謀反する。しかし、軍勢振わず梁・西魏と手を結ぼうとしてきた。武帝はその対応に迷うが、二月中頃、腹臣朱异の献言で決断し、侯景の帰順を入れる。侯景は最初のうちこそ臣下の礼を取ってはいたが、やがて本性を現わし、不敵な野心を抱くようになる。この間の様子を「哀江南賦」は、

飲其琉璃之酒 其の琉璃の酒を飲み

賞其虎豹之皮。 其の虎豹の皮を賞む
見胡柯於大夏 胡柯を大夏（西方の国名）に見
識鳥卵於條枝。 鳥卵を條枝（同右）に識る
豺牙密厲 豺牙 密かに厲とがれ
虺毒潜吹。 虺毒 潜かに吹かる
輕九鼎而欲問 九鼎を輕んじ 問わんと欲し
聞三川而遂窺 三川を聞き 遂に窺う

（一一七・二、四）

酒を飲むのは、侯景の帰順を受け入れ、盟いを立てるためである。また、献じられた虎豹の皮を誉めたたえるというのは、『左伝』襄公四年に、嘉父が晉侯に虎や豹の皮を諸戎に贈り、戎と結ぶよう要請したことを踏まえたもので、異民族との同盟の意である。この和好により、梁は西域の珍貴な物を見たり、知ったりできるようにはなった。しかし、その一方で、豹の牙が潜かに磨かれ、虺の毒が潜かに吐き出されるようになった。「九鼎」は、『左伝』桓公二年に、武王が商に勝ち、その戦利品として鼎を洛邑に遷したと記され、天命の所在を象徴する。また「鼎を問う」は、『左伝』宣公三年に、楚子が洛水のほとりまで攻め入った時に、周の宝である鼎の大小を問うたとあり、天命の改まるを天下に問う意である。即ち、侯景の梁朝篡奪の野心をいう。

侯景の危険な申し入れに、梁が心動かされたのは、北朝との長年に及ぶ緊張関係に加えて、国内的にも閉塞状況を迎えており、もし梁の版図を東魏にまで真に拡大できれば、今日の行き詰まりを一挙に打開する絶好の機会だと読んだからであろう。己の力でさえ長年実現できなかったことを、この謀將をうまく利用して、という他力本位の危険な賭けだった。下手をすれば、様々な矛盾に喘ぐ梁朝を、東魏との全面戦争に駆り立て、再起不能に追いやるかもしれない。頼みは奸者侯景を、さら

に奸計をもつていかに懷柔するか、これのみである。宮廷会議でも相当の懸念が表明されたようだが、結局梁は、自前の努力に倦み疲れ、代わりにか八かの奇策を選ぶのである。この折の庾信の態度がどうだったか、定かではないが、帝意に内心強い不安を覚えていた一人だったと思われる。庾信の文集中には、その折の不安が後に現実のものとなつてしまったが故に、それを回避できなかったことよりするであろう、強い腹立ちの表現が見られる。

盟千乗之国 千乗の国と盟するには
須季路之一言 季路の一言を須つ

(擬演珠 其三)

蓋聞 得賢斯在 蓋し聞く 賢を得て斯れ在らば

不藉揮鋒 揮鋒(奇才)を藉まず

股肱良哉 股肱 良ければ

無論応変 無論 変に応ず

是以屈倪参乗 是を以つて屈倪は参乗して

諸侯解方城之困 諸侯 方城の困みを解き

干木為臣 干木は臣と為り

天下無西河之戰 天下に西河の戦い無からしむ

(同 其四)

前者は、『左伝』哀公十四年にいう、賢人季路が不忠者の帰順の申し出を拒否した故事を踏まえ、侯景を受け入れるべきではなかったことをいう。後者は、もし梁朝にかつての賢人達―楚の屈完(『左伝』僖公四年)や魏の段干木(『史記』魏世家)―がいれば、敢えて奇才の輩を用いずとも、危機回避の道が開けたかもしれぬをいう。深い愛情を注ぐ対象の中に危機的局面を見出した時、人はその現実直視を一層深め、また細やかにするものだが、これらの表現には、そうした当時の庾信の心境が反

映されていると思われる。

侯景は東魏と梁・西魏の三国の複雑な思惑を利用しながら、巧みな遊泳をはかった。今や東魏にとって、侯景は赦しがたい売国奴だった。東魏は梁に総攻撃をかけ、梁軍の総帥蕭淵明を囚えてしまふ。そこで梁は、北方に抑留中の蕭淵明と侯景の相互交換を画策する。これが侯景に漏れ、彼は梁への怒りから謀反を決意する。狡猾な侯景は、かつて武帝の養子で後に太子から外され、強い憤懣を抱いていた臨賀王蕭正徳を味方につけ、建康を攻める計画を立てた。そうとは知らず武帝は、臨賀王を平北將軍となし、台城の守備の一角につかせた。この様子を庾信は、

始則王子召戎 始めは則ち王子の戎を召し

姦臣介冑 姦臣の介冑するにあり

(哀江南賦 一二〇・一)

と歌う。「(梁朝滅亡の)端初は、臨賀王が胡賊侯景と内通し、(それを武帝が知らずに)この姦臣に將軍の位を授けたことにある。」

太清二(五四八)年、十月二十四日。侯景軍が都の南七里の朱雀航南に迫ると、これまで五十年間戦火を知らずにきた都下は大混乱となった。この時建康令庾信は、朱雀門南の守備にあたつた。そして朱雀門を固めていたのが、例の内応の蕭正徳だったのである。凶暴な侯景軍は朱雀航にて庾信軍を蹴散らし、そのまま蕭正徳の朱雀門を楽々と通過、一気に台城へと迫つた。侯景軍の怒濤のごとき勢いの前に、なすすべもなく敗走した庾信だが、その折目にした賊軍の異様な色に、激しい戦慄と憎悪心を騒ぎ立てられるのである。

爾乃桀黠横扇 爾うして乃ち桀黠は横扇し

馮陵綏甸 綏甸を馮陵す

擁狼望於黃圖 狼望を黃圖に擁ぎ

填廬山於赤縣 廬山を赤縣に填す

青袍如草 青袍 草の如く
白馬如練[×] 白馬 練の如し

(同 一二〇・三、四)

その語気には怨念の奔りが感じられるが、ここも典故に阻まれて、俄かに意を解しがたい。「馮陵」は、『左伝』襄公八年に、鄭の王子伯駟が「楚の」わが郊の保(壘)を焚き、我が城郭を馮陵すれば、敵邑の衆、夫婦・男女、(家に)啓処^{くわく}ぎ^ふ以て相救うに違^{たが}あらず」と言うのを踏まえ、城下の市民を蹂躪する侵略をいおう。「狼望」「盧山」は匈奴の地名。「黄図」は宮殿・京師を指し、「赤鼎」は中国をいう。なお「狼望」は、ここでは狼のごとき野望の懸詞としてあろう。「あの桀・黠のごとき大悪党めが、よこしまな心を恣にし、都城を侵し、狼のような野望を梁に抱き、その結果、わが美わしき国土は夷狄の中に沈んでしまった。眼前に躍り狂った賊軍のあの異様な色よ。」

続いて「哀江南賦」は、侯景の東宮の占拠を生々しく描く。さらに侯景軍はここを拠点に、台城攻撃を波状的に続行した。しかし、台城は容易に落ちなかった。双方に多くの死傷者が出たが、さらに侯景軍は市内にも出かけ、食糧や婦女を思いのままに掠奪した。まもなく梁の諸王の援軍が到着したが、情勢を見守るのみで動かず、やがて年が明けて太清三年となる。その激しい攻防を庾信は、

天子履端[△]麋朝 天子 履端(正月)なるも
單于長围[△]高宴 單于 長く高宴を囲む
兩觀当戟 兩觀 戟を当てられ
千門受箭[△] 千門 箭を受く

(哀江南賦 一二〇・四)

「履端」は、『左伝』の文公元年に、「先王の時を正しうするや、端を始めに履み、正を中に挙げ、餘を終りに帰す」ということより転じ、正月

を指す。「天子は新年を迎えても、重要な朝賀の礼を取り止めねばならなかった。しかるにあの單于とも言うべき侯景は、東宮に入り込み長々と酒宴を張ったのだ。そしてこの神聖な皇宮を、至る所凶器で傷つけたのだ。」

次に、「哀江南賦」は、列將の作戦の失敗を無念の思いをもって歌う。

陶侃空争米船 陶侃は空しく米船を争い
顧榮虚搖羽扇[△] 顧榮は虚しく羽扇を揺るがす

(一二〇・六)

まず、東晉の將陶侃の故事を借りて、太清二年王琳が湘東王繹の命令で、米万石を船に載せ、荊州から建康へと援軍に向かったことをいう。しかし、船が到着しないうちに、建康の都は陥落していた。王琳はやむなく米を江に沈め、荷を軽くし荊州への帰還を急いだのである(『南史』卷六十四 王琳伝)。次に、白羽扇を一たび揮って、叛乱軍を潰滅させた晉の顧榮の故事を借りていう。羊鴉仁は、一度結んだ梁との和議に違背した侯景を伐つために、仲間とともに侯景軍を攻撃したが、逆に敗られてしまう(『梁書』『南史』 羊鴉仁伝)。折角の作戦も効を奏さず、空しく無に帰すばかりだった。

庾信はこの後に、兩軍の膠着状態、及び梁軍の惨敗を描く。

烽随星落 烽は星に随いて落ち
書逐鷺飛[△] 書は鷺を逐うて飛ぶ
遂乃斃分趙裂[△] 遂に韓は分かれ趙は裂け
鼓臥旗折[△] 鼓は臥し旗は折らる
失群班馬[△] 失いし群 班れし馬
迷輪乱轍[△] 迷いし輪 乱れし轍^{わだち}
猛士嬰城[△] 猛士 城を嬰し
謀臣卷舌[△] 謀臣も舌を卷く

(哀江南賦 一二五・一二二)

援軍が侯景軍を包囲しているとはいふものの、台城との連絡は容易にできなかった。簡文帝が状況を知らせる勅文を結わえ付けた風を飛ばしたが、それも侯景軍に見つかり射落されてしまう。「鼓臥旗折」とは、援軍を發した邵陵王綸が、賊の機敏な戰略にしてやられ、主要な部下を囚われてしまったことをいう。また「班馬」は、『左伝』襄公十八年の、邢伯の言葉、「班れし馬の声有り、斉の師其れ遁げるならん」を踏まえ、味方の敗走をいう。援軍は内部分裂し、蹴散らされてしまった。こうした中でさしもの猛士・謀臣も、城を閉ざし、口をきくことさえ稀になつてゆく。

台城の籠城は愈々窮まり、有効な方策もなく、決死の突入で血路を開くよりなかった。皇族に先立って、まず臣下の方に父子・兄弟揃って壮烈な死を遂げたり、離別したりという例が相継いだ。その中でも、韋粲と江子一の例は、人々の涙を誘う。

護軍慷慨	護軍(韋粲)は慷慨し
忠能死節	忠にして能く節に死す
三世為將	三世 將と為るも
終於此滅	終に此に滅す
濟陽忠壯	濟陽(江子一の兄弟)は忠壯にして
身參末將	身は末將に參ずるも
兄弟三人	兄弟三人
義声俱唱	義声 俱に唱う
主辱臣死	主は辱しめられ 臣は死し
名存身喪	名は存するも 身は喪ぶ
狄人歸元	狄人 元(首級)を歸せば
三軍悽愴	(梁の)三軍 悽愴たり

(一二七・一二八・一二九)

韋粲は、有名な車子將軍韋叡の孫である。韋粲が青塘に駐屯していた時のこと、霧の深い日に侯景軍に攻撃されてしまう。左右の者が逃走を勧めたが、彼はそれを拒み、最後まで陣中にあって自身の子弟を叱咤して戦わせ、ついに殺害されるに至る。のみならず子の尼も、三人の弟助・警・構、それに従弟の昂もすべて戦死、親戚全部を合わせると犠牲者は数百人にも及んだ、という(『梁書』『南史』韋粲伝)。ここに叡・放・一粲と三代にわたり、將軍となってきた韋家も滅びることとはなった。

庾信は次に脚韻を変えて、濟陽の江子一兄弟の決死の突入を歌う。子一は賊が都城に迫ると、承明門を開いて打って出、士卒の先頭に立ち、一人戈を振りかざして突き進んだ。しかし、賊軍の挟み打ちに遭う。味方の軍勢がひるんで行かないのを見て、子四・子五が急ぎ駆けつけたが、ついに三人とも害されてしまう(『梁書』江子一伝)。賊は子一の武勇を義とし、その遺体を梁に帰してきたが、その面は生けるがごとくだった、という(『南史』同伝)。梁の全軍はそれを見て、深い悲しみに包まれたのだった。「狄人歸元」は、『左伝』僖公三十三年の、晉の大夫先軫の討死の故事を踏まえる。義に篤い先軫は、狄の軍が晉を攻撃してくると、今こそ君への恩を返す時とばかりに、敵陣に討ち入り死を遂げる。それを義として、「狄人は其の元を歸す。面、生けるが如し」とあり、庾信の表現はこれを借りたものである。以上庾信は、侯景の謀反に始まり、台城の包囲・空転する援軍・悲惨な籠城・英雄の無惨な死等を、歴史に沿って逐一たどってきた。もう後には、台城での最後の決戦が残されるばかりとなった。

「哀江南賦」は、愈々台城の最後の守りを描く。まず台城を支えたのは、羊侃である。

尚書多算

尚書(羊侃)は算多く

守備是長。守備 是れ長ず
雲梯可拒。雲梯も拒む可く
地道能防。地道さえ能く防ぐ
有齊將之閉壁。齊將の壁を閉づる有るも
無燕師之臥牆。燕師の臥牆無し
大事去牟。大事は去りぬ
人之云亡。人の云に亡ぶ

(一二八・一〇二)

羊侃は、侯景が反して以来、胆力のあるのを武帝・簡文帝に見込まれ、大いに頼りにされた人物である。台城の苦闘が続く中で、羊侃は必死の防戦を試みている。賊軍が尖った頭の木馬で城を攻めてきた時には、矢も石も役には立たず、そこで侃は雉の尾を炬にし、鉄の鏃を付けてこれに油を注ぎ、敵の木馬に命中させ焼き尽くす戦法を取った。また賊軍が東西両面から土山を築いて、梯を城壁にかけて攻め寄せんとした時には、城中大いに震え上がったが、侃は地道を掘らせ、その土山を下から崩す手に出ている(『梁書』『南史』羊侃伝)。羊侃の守りの堅固なことは、昔の齊の田単のごときだったが、惜しむらくは戦乱のさ中に病没し、あの後燕の慕容垂のように、病中城を築くというわけにはいかなかったことである。人々の落胆はいかばかりだったろう。

羊侃歿後、台城の守将となったのが、柳仲礼である。『南史』柳仲礼伝によれば、仲礼は「当世の英雄にして、諸将若く莫し」と豪語していた。梁朝にとっては、これが最後の切り札だった。

申子奮発。申子(柳仲礼)は奮発し
勇氣咆勃。勇氣 咆勃なり
実総元戎。実に元戎を総へ
身先士卒。身は士卒に先んず

宵落魚門。宵 魚門に落ち
兵填馬窟。兵 馬窟に填ず
屢犯通中。屢々通中を犯し
頻遭刮骨。頻りに骨を刮るに遭う
功業天枉。功業 天枉し
身名埋没。身名 埋没す

(一三〇・一〇二)

柳仲礼は侯景の乱の初め、侯景の謀反を一早く察知し、積極的に朝廷に討伐を働きかけた人物である。が、その時は、朝廷がそれを許さなかった。このことがあって、侯景は内心仲礼を甚だ恐れていた。今度こそこの気概をもって仲礼は、討伐軍の先頭に立ち、大いに奮戦したが、青塘の敗北以後は、まるで人が変わってしまった。というのは、この時仲礼は敵將の支伯に後方から切りつけられ、馬が泥中に落ちた所を、集まってきた賊兵に危うく刺し殺されそうになるのである。そこへ運よく味方の郭山石が援護に来て、九死に一生を得る。が、剣の切り傷は深く、その毒のために彼はしばしば苦しめられることになる。それからというもの、壮気頓に衰え、重大な將軍會議にさえ、一言も発言しなくなった(『南史』卷三十八 柳仲礼伝)という。ところで、右の一段にも『左伝』関係の表現が、二例見られる。「元戎」は、『左伝』宣公十二年に、令尹孫叔の言として、「我が詩に云う、《元戎十乘、以て先ず行を啓く》(小雅・六月)と」、また昭公十三年にも、劉の献公の答弁として、「天子の老以て先づ行を啓かんことを」とあるのを踏まえる。即ち、先頭を行く大きな戦車隊を指す。柳仲礼の緒戦の華々しい活躍を言う部分である。次に「魚門」は、『左伝』僖公二十二年に、小国の邾を侮った僖公が邾に敗北を喫し、その胄を取られ、邾城の魚門に懸けられた故事を踏まえ、

敵を侮った柳仲礼が一敗地にまみれたことをいおう。そして仲礼は、ついに味方の嘆きと憤りの中、諸将を引き連れて賊軍に投降する。

太清三（五四九）年三月十二日、台城は陥落した。庾信はその悲惨な光景を次のように歌う。「虎の威を借りた暴徒が殺戮をきわめ、刀剣にはその血がしみつき、原野にはその脂肪が流れ出た。わが軍は弱く、賊軍が強かったのだ。台城は孤立して霸氣少なく、鶴のむせび鳴きを聞いては心驚き、胡笳を聴いては涙がこぼれた。」（二三〇・二一三）ある時、侯景との内通により、既に天子に祭り上げられていた例の蕭正徳が入城しようとしたが、賊軍はこれを遮り、挙句には正徳を降して侍中としてしまった。正徳は騙されたことを知り、鄱陽嗣王に密書を出し、侯景を討とうとしたが発見され、ついに殺されてしまう（『南史』巻五十一蕭正徳伝）。「哀江南賦」に、

既官政而離邊 既に官政するも離邊し
遂師言而泄漏 遂に師言するも泄漏す

（一二〇・二）

というのがそれである。ここは『左伝』を典故とした対句になっている。

「離邊」は、襄公十四年に、晉の范宣子が戎子呼びつけ、叱責したことの反論として、戎子が名調子でその非を述べる中に、「豈に敢て離邊せん」というのを踏まえ、華夷の間の盟いが破綻するをいう。これなどは蕭正徳―侯景の關係によく符合した典故となっている。次に「師―漏」は、僖公二年に、齊の寺人の貂が軍の秘密を漏らしたとあるのを踏まえる。同出典による厳密な対句の構成だが、庾信の才気が端的に表われている。

「哀江南賦」は、建康陥落に至る過程を、ひとまず次の段落で締めくくる。

於是桂林顛覆△ 是に於て桂林（宛名）顛覆し

梁朝社会下の庾信

長洲麋鹿△	長洲（宛名）には麋鹿あり
潰潰沸騰	潰潰として沸騰し
茫茫慘黷	茫茫として慘黷す
天地離阻△	天と地は離阻し
神人慘酷△	神と人は慘酷す
晉鄭靡依△	晉と鄭は依る靡く
魯衛不睦△	魯と衛は睦まず
競動天関△	競いて天関を動かし
争迴地軸△	争いて地軸を迴らす
探雀殼而未飽△	雀殻を探すも未だ飽かず
待熊蹯而詎熟△	熊蹯を待つも詎んぞ熟さん
乃有車側郭門△	乃ち車を郭門に側める有り
筋懸廟屋△	筋は廟屋に懸けらる
鬼同曹社之謀△	鬼は曹社の謀を同じうし
人有秦庭之哭△	人には秦庭の哭有り

（一三三・一―三）

建康の都は、野獸の住む地も同然だった。天地は阻てられ、神も人も酷い目に会った。これも梁の諸王の内紛が絶えず、援軍がうまくいかなかったためで、いわば人間の方で争い競って天地の軸を動かした結果である。そして武帝はこの五月に没し、その後即位した簡文帝も、大宝二（五五一）年十月に殺される。簡文帝の諸子二十余人も皆害され、人々の怨み・嘆きは深かった。

この段落には、四箇所『左伝』からの出典が見られる。まず「熊蹯」は、文公元年、楚の世子商臣が成王を囲んだ折に、成王が熊の蹯（手のひら）を食べて死にたいと請うたが、聴き入れられず、のちに縊死した有名な話しを受ける。また宣公二年には、晉の靈公の徳に欠けるを言う

話として、料理人の「熊蹯」の煮方が「熟さず」として、霊公がこれを殺したとある。本文の「待熊蹯而詎熟」は、これらを総合して踏まえよう。「車側」は、襄公二十五年に、斉の崔杼が主君の莊公を殺し、その棺を北の外城に車とともに埋葬した故事を指す。この時、武器をともに埋葬しないのは、十分な礼を行わぬを示す。この「側」は、杜注によれば、本葬のための殯りもせずに、粗末な葬式をする意である。簡文帝の場合は、戸を壊して棺とし、城北の酒倉で殯りを済ませるといふ惨めなものだった。「曹社の謀」は、哀公七年に、曹人が「社宮」で曹を滅ぼす相談をしている人々の夢を見た所、後にそれが現実のものとなったとあるのを踏まえる。ここは、犠牲になった亡霊達も、報復のための謀り事に加わるをいおう。「秦庭の哭」は、定公四年に、楚の申包胥が秦に援軍を乞いに行き、断わられたために王廷の墀にすがって七日七夜、泣き続けた故事がある。倪注では、前後の文脈を考慮して、庾信が江陵に援軍を乞いに向かう意とする。が、ここは、庾信も含めて多くの人々が、報復のための援軍を求めて慟哭する意と解したい。

四 庾信の文学意識の変化

本章では、建康陥落下の庾信の文学意識の変化の様子を探ってみようと思う。といっても、この時期、庾信の作品はないので、後年の作品でこの当時を描いたものの吟味を通して、聊か考えを述べたく思う。

庾信の従来までの「宮廷詩人」としての意識は、現実の政治の至高性を天意と同一視し、それを華麗・優美に賛美することで、国政に寄与し、己の責務を果たさんとするものだったと思われる。しかし、庾信はこの度の深刻な体験を通して、このような認識の甘さを思い知らされたに相違ない。中国の悠久の文化が物語っているように、現実とは、決して人間の規定通りには動かぬ、きわめて複雑・多様なものである。人間の方

で勝手に世界を秩序立てたり、審美化したりして見ているにすぎない。ことに梁朝宮廷社会は、豪華な調度品や服飾・艶麗な女性美といった狭い視点に立って、極度に優雅な詩文を多く織り上げた。庾信はこの文学の推進者の一人として、かつてはその華麗さを称賛されたものだが、今や、この文学の前提たる世界が崩壊してゆく中で、自から現実を凝視した文学へと転換せざるを得なかった。激動する現実に目を向けた庾信は、人知を越えてある世界へのおののきに襲われるとともに、また己の無能・無力に愕然としたに違いない。しかし中国の文化は、このような悲歎をたちまちにして相対化し、絶望にも耐え得る強靱な力を持っている。

庾信は、荒れ狂う眼前の事態の一つ一つを克明に、脳裏に刻みつけ、それらの全体を、古典に現われた過去の事跡と対照することで、今日の歴史の方向を洞察し、それを今後の政治に連結してゆくよりない、との認識を抱くに至ったと考えられる。この時期、庾信の態度は、現実をそのまま肯定し受容するものから、次第に、その意味を問ひ、是非を考えるという、現実から一步距離を置いた、批判の眼を持ったものへと変化していったように思われる。それは、現実から遊離してしまった貴族が、改めて彼の全感覚を使いながら、あるべき世界への模索を苦しみのうちに始めたことを意味しよう。そのような庾信の態度を、以下、作品の中で検討してゆくことにしよう。

まず、「哀江南賦」と、これまで少なからず引用してきた『左伝』との関係、及びその意味について考えてみたい。たとえばすぐ前の段落の、「熊蹯を待つも詎んぞ熟さん」は、古来、『左伝』中の名文の一つといわれる部分を典故に持つが、そこでは熊の旨肉云々よりも、結局天子のがれられぬ死の運命を指す。それがまた梁の武帝の場合と、密接に重なり合うのである。また、「車を郭門に側める」は、『左伝』の原話を解する時、それが高貴な人の不幸な死に様を指す意だと気づく。さらに前

の段落の、「胃、魚門に落つ」は、敵を侮った武將の惨敗をいい、「狄人、元を帰す」は、義人の敵をも感動させる討死をいう。このように個々の事件の叙述の奥には、厳しい歴史的真実が流れており、それが巧みに活かされ、「哀江南賦」全体に深味を与える効果をもたらしている、といえる。

このほか、本論中には引用しなかった「哀江南賦」の部分より、『左伝』の典故を幾つか拾ってみよう。まず、「見被髮於伊川 知百年而為戎矣」（二一四・四〇五）は、僖公二十二年に、平王の東遷した折に、辛有なる人物が伊川で、地元住民が冠もつけぬ野蛮な装で野に祭りを行っているのを見て、「百年に及ばずして、ここは戎の地となろう」と述べたところが、秋になり、それが現実のものとなるという故事を踏まえる。庾信はここでは、梁の今日の礼なき状態が、敵の侵寇を誘導し、危機的時局の迫っていることに喩えている。また、「大則有鯨有鯢 小則為梟為鸞」（二一七・一）は、宣公十二年に、楚王の言として、昔の賢王は不心得な国を討つ時、頭領たる「鯨鯢」を討ち大罪の見せしめにし、不義不正を懲らしたとあり、「鯨鯢」は不義の輩の頭領を指す。ここでは侯景の喩えである。庾信は、賞罰を明確にする『春秋左伝』の筆法を甦らせ、このほかにも侯景を、「戎」「桀黠」「狼」「單于」等と、激しく罵っている。さらに、「晉鄭靡依 魯衛不睦」（一三三・一一二）は、隠公六年に、周の桓公の言として、周の東遷の折に最も頼りとなったのは晉と鄭だとなり、「晉鄭」は、有事の際の心強い援助者の意である。庾信はここでは、国家の一大事に、力を合わせて闘うべき梁の諸王子達に喩え、その人道に反く態度を取ったことを厳しく批判するのである。

このように見てくると、庾信は、『左伝』が有する、豊富な戦乱に関する表現の借用はいうまでもなく、政治腐敗への敏感な倫理感、それを客観的に賞罰せんとする叙述態度等の、いわば『左伝』の本質的な精神

をも、自からの作品に積極的に受容していることが伺える。庾信がこのような適切、かつ効果的な『左伝』の借用を、随所で可能にするためには、おそらく眼前の梁の衰退の過程を、春秋時代のそれとオーバー・ラップさせつつ、その一齣一齣を『左伝』と重ねて見ていた、とても推測しなければ到底なし得ないことのように思われる。本稿の冒頭でも述べたように、庾信は非常な読書家だったが、とりわけ『左伝』には明らかなように、『北史』庾信伝には、「群書を博覧し、尤も『春秋左氏伝』を善くす」と記されている。また、「哀江南賦」序には、この作品の執筆の一因として、杜預に『左伝集解』のあることを挙げ、暗に自己の目標の一つに掲げるほどである。加うるに、『梁書』『南史』の各伝をひもとくと、『左伝』を善くした人物として、裴邃・羊侃・王僧辯・劉勰・敵愾之・賀瑒の子、革・崔靈恩等が、また『陳書』になるが、沈文阿・沈珠等がおり、將軍や国子博士を中心に、当時『左伝』学が盛況だったことを伺わせる。江南の貴族の間では、『左伝』関係の語は、ある程度常識語だったと思われる。このような互いの切磋琢磨の上に、庾信の『左伝』への深い造詣もあったといえよう。

以上、『左伝』のみを掲げたが、言うまでもなく、庾信の典故は多方面に及んでいる。このような古典の知識は、彼にとっては常識語としてあったものだが、それにしても一般の人々の日常語からは相当の隔りがある。そこに「哀江南賦」の難解さがあるわけだが、といってもこれは作品自体の難解さを意味しない。丹念に原典の意味を確認し、作品に沿って原話のどの部分を取捨選択すべきかを適確に判断し、それを再度作品の文脈に置いて読んでみる、という作業を重ねてゆけば、重い足どりではあるが、徐々に時代を越えてある言語の内部生命の深味を伴いながら、またその高い象徴力の故に、単なる事件の記録としてではなく、生きた歴史の全体性をもったものとして、我々の胸の中に把握されてくる。

それは結局、「哀江南賦」がすぐれた芸術作品であることを、自から立証するものである。それはともかくも、たとえ『左伝』を頂点とする古典の豊かな教養があったところで、そこに激動する現実の総体を凝視する庾信の張りつめた全身の神経が働いていなければ、このような作品は生まれてはこない。あの優美な「宮体詩」を政治的に織ってみせていた頃の、宮廷随一の繊細な感覚から、一挙に日常性を取り戻したかのような大転回があつてこそ、長い南朝貴族社会で洗練された賦のスタイルと、悲惨な意味の世界との核融合が生じ得、そして屈原の「離騷」以来の辞賦文学の傑作ともなり得たのである。では、なぜ庾信は、あらゆる現実感覚を働かせねばならぬ日常性への回帰を測りつつ、言語表現では一線を画して、古典語Ⅱ非日常語をこれほどまでに重用せねばならなかったのだろうか。私は庾信の胸の奥に、何よりも、強大な国家をも解体させてしまう、歴史の凄しい流れに対するおののきがあつたろうという点に、注目したい。生あるものは、すべていつかは滅ぶ。まして、多少の瑕を内在する人造物は、たちどころに消滅するのが、歴史の掟である。この恐ろしい歴史の無化作用に抗して、永遠の時間帯に上り得るには、ぜひとも高い芸術作品でなければならぬ。当時の貴族がこれを具体化するには、やはり正統的な経書の高い精神性を継承し、それを現代にあてはめつつ、新たな生命を賦与するよりなかつたろう。庾信の「哀江南賦」は、これを完璧なまでにやり遂げようとしたものにほかならない。さらに、庾信が古典語を重視した背景には、彼が、現実の多くは墮落した時間であり、古典の世界を支配するのが永久の聖なる時間だと認識し、この永遠性を絶えず現前化することで、現実に対処しようと考えていた、という点も忘れてはならない。

では次に、建康陥落下の庾信の「傷心」を見てみよう。庾信は今度の乱で、三人の幼な子と一女、及び外孫とを亡くした。その深い悲しみを

北遷後まもなく作品にしたのが、「傷心賦」である。制作は北遷後だが、当時の庾信の悲痛な心情を伺う上で、これは重要な資料だと思われる。

私は金陵の騷乱で、衣服をまとえるようになったばかりの、二男一女を相継いで亡くした。…あの子達は蕾だけで花開かずに死んでしまい、その悲しみはいつまでも癒えぬ。さらに成人した一女と、外孫で幼ない子供も黒土と化せしめた。こんな痛ましいことがあろうか。…嗚呼、哀しいかな。賦という、

わが子らの魂は遠く

いづこに去り いづこに依っているのか

死者の靈魂は望めず 帰ってはこない：

痛ましきかな 親子の間

きき正したき この時代

天道とは慈しみ

人倫とは愛すること

なのに膝下の龍は摧け

掌中の珠は碎ける：

子らのために 藤縄で小さな棺桶を結び

ふしのない木で蓋を作り そを覆う

戦乱のさ中 盛り土もせず 墓木も植えず

すっかり荒れ放題

娘の食器を見ては心痛み

子の書いたものを撫でさすっては慟哭す：

われはなお生くるに

子らが先に土に化すとは：

子らが生き返ることは無理

が せめて生まれ変わってでも 戻ってきてほしい：

「傷心賦」序には、まず、わが子を夭折させた前代までの主な文人の名が連ねられている。楊雄（楊鳥・九才）、謝安（嵇と琰）、曹植（金瓠・一九〇日、行女・七くハヶ月）、王粲、晉の劉韜の母孫氏、潘岳（沢蘭・三才）、羊祜（名不明・五く六才）等々である。このうち曹植「金瓠哀辞」「行女哀辞」、王粲「傷心賦」は、愛児を奪っていった天への悲痛な嘆きを歌い、格調の高い作品となっている。ただ、いずれも短編であるのが惜しまれる。庾信の「傷心賦」はこれらの系列に属する作品だが、亡くなった子への細やかな真情が、韻文の形式で綿々と歌われており、前記の作品に比べ格段の厚味を持ったものとなっている。ことに荒れるに任せた墓・愛児の遺品に心を傷める部分などは、有名な潘岳の「悼亡賦」を強く意識し、その高い文学性を、愛妻より愛児の場合へと巧みに転化し、見事に成功している。しかも庾信は、愛児の死を通して、同様の悲しみに遭った人々へも思いを寄せる。賦中には、「昔、金陵にあつて天下騷乱の折、王室は無道に陥り、人民は塗炭の苦しみをなめた。……ある者は、子供を丸太のごとく抱えて逃げ回る途中に災難に会い、ある者は、衣に藏れて逃難を試みたが、不幸にも乱に巻き込まれてしまった。昔は、子供が生まれて三日したら、桑の木で弓をつくり、矢を四方に放ち、成長を祈ったというが、それもできない間に子を喪う者もいた。」と歌われている。

このような悲劇の原因は、何処にあるのか。かつて曹植は、子の死について、「年を終えずして夭絶す。何ぞ皇天より罰せられん。信に吾が罪の招く所にして、弱子の傷^{あやま}ち無きを悲しむ」（金瓠哀辞・『全梁文』巻十九）といい、また潘岳も、「赤子何ぞ辜^{つみ}あらん。我を罰するの由なり」（傷弱子辞・『全晉文』巻九十三）と歌った。即ち、夭折は、罪を犯した己が天罰の結果だというのである。庾信はおそらく右の作品を知っていたはずだが、「傷心賦」にはこのような考えは見られない。庾信

の事跡をたどっていると、彼はじつに家族愛に満ちた人物だったように思われる。これらの家族とともにあればこそ、庾信の栄光の時代も一層幸福なものとなり、後年のあの江南への望郷心をも強く誘うのだろう。庾信のみならず、当時の犠牲者たちで愛児の死を各々の罪の酬い^{うらな}だなどと考えた者がいただろうか。今日の悲劇の原因は明らかだった。

己らは人倫の道を守ってきたのに、このような悲しみを受けねばならぬとは……。もしも己の罪の故だと諦め切れるならば、問題は個人に限定される。しかし、自己の正しさを信じてやまない時、人は、あの屈原や司馬遷のように、その問いを天上にまで引き上げずにはおれない。庾信も賦の中ほどで、天を仰ぎ見ている。が、「天は惨惨として色無く雲は蒼蒼として正に寒し」と、天はただ沈黙するのみである。期待は裏切られ、人は深い悲しみに沈んでゆく。これらは、時代を越えてある、人間と天との断絶の悲しみを自覚した一定のパターンである。ところが、今の事態はそれのみでは済まなかった。天は彼のみならず、社会全体に対して口を噤んでいるからである。そうなれば、人々は今の社会の掘るべき基盤が、今やすっかり喪われたのではないかと、愈々不安におののくよりない。この余りにも無秩序化した恐ろしい世界を前にして、何とかして正確な宇宙秩序を探り出さねばならなかった。ところが、今その天が把握しがたきが故に、人々は一層救い難き混乱の中に投げ出されていると意識する。こうなると、人間の価値基準を越えてある天に対し、人々はいつしか虚無的な感懷を覚えざるを得ない。しかし、ここで敵しく無力感を退け、真理を問い続ける者は、広大無辺な理と一瞬でも触れ合い得るのではないか。それを感じた者は、傷心の極みより、やがて悲しみを深く沈めて、現実へと舞い戻ってこよう。が、その沈黙は、内に深く沈潜し、時を経てやがて豊かな芸術作品の地下水ともなる。かくして庾信の「傷心賦」も成ったのではないかと想像される。

庾信は以後、建康陥落下の苦悶を通して、世界・人生への理解を深化させ、次第に尖鋭な批評眼を培い、梁末の政治を懸命に正すべく、努力していくのである。

五 梁の滅亡―傷心を懷慘たらしむもの

続いてその後の庾信の足跡、また梁の動きについて、見てゆくことにしよう。太清三（五四九）年、庾信三十七才。庾信は廢墟と化した南朝の栄華の跡・建康を離れ、中興の主と仰ぐ湘東王のいる江陵へと向かう。その途中には、様々な障害が立ちはだかった。関所で訊問を受けたり、通行税を取られたり、馬と船の旅に苦しんだり、道に迷ったりと、江陵に着くまでに「十死に浜し」という有様だった。

江陵到着後の庾信は、自身を率直に罪人と認めていた。金陵陥落の責任を痛感しての故である。

赭衣居傳巖 赭衣 傳巖に居り

垂綸在渭川 綸を垂れて渭川に在り

（擬詠懷詩 其二）

庾信はの中で、自らを「赭衣」（囚人の着ている赤い服）を着て役に服した殷の傳説に喩えている。ところが、傳説が高宗に見い出され、また呂尚が周の文王に見い出されたように、己も梁の元帝に召される身となった。罪人より、意に反して右衛中軍・御史中丞の高官を拝命することになった庾信は、「本より危き行いに達せず 又禄仕に情無し 謬って中軍に衛を掌どり 濫りに御史に丞を戸どる」（哀江南賦 一四〇・三）と、これまでの己の功績を顧み、この度の聖恩に感激するのである。庾信はこのことを、「国土」としての待遇であり、「知己の恩」にぜひとも応えなければならない、と受けとめていた。

疇昔国土遇 疇昔 国土の遇

生平知己恩 生平 知己の恩

直言珠可吐 直言 珠吐く可し

寧知炭可吞 寧ぞ知らん 炭吞む可しとは

（擬詠懷詩 其六）

一命を賭して、梁の復興を誓う庾信の思いが表わされている。

この頃、重ねて不幸が庾信を襲う。父肩吾の死である。肩吾も苦難の果てに江陵にたどり着いていたが、まもなく没している。肩吾は逃走の途中で、今日の世の中を立て直すには、改めて「天道」を詳しく見極めねばならぬ、との思いを深くしていた。彼の詩には、

人事今如此 人事 今此くの如し

天道共誰論 天道 共に誰とか論ぜん

（乱後行経吳御亭 『全梁詩』卷七）

と歌われている。死を迎えて肩吾は、この思いを息子に託したようだ。庾信はそれを、かの司馬談―遷父子のことと関係づけて歌っている。

嗟天保之未定 嗟 天保の未だ定まらず

見殷憂之方始 殷憂の方に始まるを見ゆ

信生世等於龍門 信 世に生まれて龍門に等しく

辭親同於河洛 親に辞するは河洛に同じ

奉立身之遺訓 身を立つるの遺訓を奉じ

受成書之顧託 書を成すの顧託を受く

（哀江南賦 一四〇・二―一四一・一）

「龍門」は司馬遷の誕生の地、「河洛」は司馬談の死没の地である。庾信は自ら現代の司馬遷たるべしと位置づけ、父肩吾の遺言をまさに己の使命と受けとめたのである。では、「天道」を正確に測るにはどうすればよいのか。まずは、歴史の経過を正しく記録し、その一つ一つの是非を問うことより始めねばならない。つまり、これが「書を成す」であり、

その完成したものが「哀江南賦」にはかならない。さらには、そこに見
い出された新たな天の意志を、現実の政治に実行できねばならない。江
陵府の庾信は、現実の推移に厳しい史家の目を向け、それより得られた
自己の所見に従って、政府の最高幹部の一人として、政治に尽力したに
違いない。が、事態はいよいよ暗くなつてゆく一方だった。庾信は、以
下梁の滅亡に至る経緯を、痛恨の思いを込めて描写する。

承聖元（五五二）年二月、湘東王繹の檄により、王僧辯・陳霸先等が
侯景討伐に乗り出す。湘東王は潮に乗じて艦隊を淮方面へと進め、また
陳霸先は石頭城に戦車を集結させた。さらにこれに各地の軍が連合し、
一斉に総攻撃をかけると、侯景軍はあつてなく崩れ、侯景は逃走し始め
た。そしてついに、逃走の途中、その部下により首を刎ねられてしま
うのである。その屍は建康に届けられ、市に曝されたが、民衆の怨恨は凄
まじく、争つてその体を屠り尽くした、という。さらに首は江陵に送ら
れ、湘東王の下で三日市に曝された後、煮て塩づけにされたのである（哀
江南賦 一四二・二〜一四三・三）。

侯景を倒し恥を雪いだ湘東王は、ようやく同年十一月、江陵で帝位に
即く。梁の元帝である。しかし、元帝の体制はまことに脆弱そのものだ
った。加うるに次々に内紛が重なり、その基盤を短時間のうちに突き崩
していった。庾信はまず第一に、侯景平定の功労者王僧辯の殺害を取り
上げる。

平呉之功

呉を平ぐの功

壮於杜元凱

杜元凱より壮

王室是頼

王室はれ頼ること

深於温太真。

温太真より深し

始則地名全節

始めは則ち地を全節と名づけ

終則山称枉人。

終りは則ち山を枉人と称す

南陽校書

南陽の校書

去之已遠△

之を去ること已に遠く

上蔡逐獵

上蔡に獵を逐う

知之何晚△

之を知ること何ぞ晚き

（一四六・五〜六）

王室より全幅の信頼を得ていた王僧辯を、かねてより疑っていた陳霸先
は、承聖四（五五五）年、事に乘じて攻め、その子の顔とともに僧辯を
殺してしまふ。「南陽の校書」とは、越王句踐を助けて呉を滅したが、
後に越王より死を賜わった文種のお話を踏まえる。ここは、国家に大功
ある者が滅ぼされるをいおう。「上蔡に獵を逐う」は、秦の李斯が趙高
の誣告により処刑される時、子に向かって故郷の上蔡での獵も今はかな
わぬ、といったことを受け、王僧辯とその子の死を傷む。王僧辯殺害の
時、庾信は西魏にあつて囚われ中の身だったが、梁の復興への野望を胸
に秘めていたに違いない。そして、今最も頼りになる王僧辯の殺害を、
国家の重大な損失として深く悲しむのである。

次に、庾信は、元帝即位前後の、諸王間の相剋の甚しさを指摘する。

まず元帝の兄邵陵王綸だが、初めは侯景軍を大破したことで自惚れ、後
には敗退すると前功を誇る我侑ぶりだった。幼少の時から性格が陰しく、
水神を射ったり、山神を鞭打ったりした。ために人々は、彼の敗戦も、
じつは山川の靈力を借りることができなかったせいだ、と噂し合ったほ
どである。そして兄弟でいがみ合い、ついに太宝二（五五一）年、綸は
元帝に迫られ西魏にて害されるに至る。ついで庾信は、邵陵王の弟、武
陵王紀の謀叛を描く。武陵王は武帝の第八子で、特に帝の慈愛を受けて
いた。武陵王は、承聖元年四月、既に蜀にて僭位し、年号を天正と改め
ていた。そして五月には、巴蜀の衆を率いて西陵に駐屯し、下流の湘東
王に圧迫をかけた。湘東王はそれに対抗して、侯景軍の降将任約と謝答

仁を獄より放ち、武陵王と対決させた。その一方で、武陵王に書簡を送り、軍を蜀に戻すよう求めたが、その文章は極めて威圧的なものだった。

『梁書』武陵王紀伝に引くその書簡には、侯景を倒し父武帝の怨みを雪いだのはこの自分であり、現在天下の経営に腐心しているのもこの自分である、と自己を正統な帝位継承者とし、弟を完全に偽者呼ばわりしている。そして、何か意見があれば、使者を遣わすから申し述べよ、と下達するのである。武陵王は余りの無礼に怒りこれを無視、翌承聖二年五月、再び東下する。それを聞いた元帝（既に前年の十一月に即位）は、方士どもに武陵王の画像を画かせ、自からその手足に釘を打ちつけ、呪いをかけるといふ有様だった。そして七月、この武陵王もまた、元帝軍の樊猛により荊門にて斬殺されるに至るのである（哀江南賦 一四六・六一五〇・五）。

今、右の部分の一部を掲げると、

問諸淫昏之鬼	諸れを問う	淫昏の鬼
求諸厭効之符	諸れを求む	厭効の符
荊門遭庾延之戮	荊門にて庾延の戮に遭い	
夏口濫達泉之誅	夏口にて達泉の誅を濫りにす	

（一五〇・四・五）

ここでも『左伝』の典故が、巧みに用いられている。「淫昏の鬼」は、僖公十九年に、宋の司馬子魚が、宋が二ヶ国の君を捕え、町の得体も知れぬ土地の牲に用いたことを批判した、というのを踏まえる。さらに庾信は、子魚の次の発言、「將に以て覇を求むるも、亦た難しからずや」の意をも、ここに込めているであろう。「庾延の戮」は、隠公元年に、鄭の莊公の弟・大叔段が兄に反発し、あちこちの領地を私領化し、とうとう庾延の邑にまで手を伸ばした。兄の莊公はしばらく弟を泳がせておき、人民が離反したのを見抜いた上で征伐し、追放した、というのを受

ける。即ち兄弟の醜い権力闘争の喩えである。「達泉の誅」は、莊公三十二年に、莊公の継承をめぐって、弟の成季が兄の叔牙に酖を偽わって飲ませ、達泉の地にて服毒死させたとある。弟の元帝が兄の邵陵王を殺したことの比喩である。

江陵府の内紛を叙述した後、庾信はそれも含めて、江陵府の致命的な問題点を四項目指摘する。①肉親同士互いに愛し合うべきなのに、弓矢をもって相争ったこと、②高禄を食む高官の無能・無責任さー守りの堅固な建康に府を遷すべきことを説かず、防備に難点の多い江陵府を認めてしまったこと、③元帝の兄弟に対する態度に、真の君子らしい徳の高さがなかったこと、④元帝の正しい倫理感の欠如ー侯景謀反の折、坐視して台城を救おうとしなかったり、簡文帝が出兵した時には、その隙を以て皇帝位を狙おうとしたりしたこと。以上の総括を通して、庾信は客観的な歴史の分析に基づき、梁室の命運が今や窮まっておき、滅亡が避けられぬ事態になりつつあることを感ずるのである。このような現実批判を深めた「哀江南賦」の叙述には、『左伝』の精神、及び司馬遷の冷静な史家としての態度の上に、客観的に世界を見る確かな批評眼を持つことを、厳しく自からに課したのである。庾信の姿が彷彿としてくる。

右のような混沌の極みの中では、もはや誰も頼りにはならぬ。皆が、個々の判断で生きてゆくよりない。他人はそれでもよいが、少年時代より格別の恩顧を梁室より蒙ってきた己は、そうはゆかぬ。今こそ「直言、珠吐くべし」の覚悟をもって、元帝の政治が「天道」に反くものであることを具申せねばならぬ。そう庾信は考え、そして実際に行動したと思われる。しかし、奈落の底へと狂騒している者の耳に達するはずもなく、また外敵の侵寇の不安の高まりの中で、庾信は梁の窮まった運命を打開するには、もはや己も、果敢な行動に出るよりない、と考えるようになったのではないか。

ところで、この梁末の王同士による激しい相剋の背景には、根の深い抜き差しならぬ問題があった。六朝史家の研究によれば、当時の皇帝は貴族体制下であつて、身分の固定化に慢性的なストレスを募らせていた中

下層階級が、折しも起こった侯景の乱に乗じて、地方府の各王の下に蟄集し、将来の地位の向上を期待して、相互に自分達の君主を新帝に擁立せんとしたのであり、またそれを王側がライバルを破るための重要な戦力として利用する、という構図になつていたのでと解される。一つの体制の崩壊を機に、多くの人間が各々の思惑で動き出したわけで、庾信がいくら政治倫理を強調しようと、それが現状を維持するためのものである限り、彼等の火のついたような闘争欲を鎮める役には立たない。ただ、

「俎豆（祭礼）は習う所に非ず 帷幄（軍政）は復た謀り無し」（擬詠懷詩 其三）と歌うように、現実の動向に十分対応できぬ己の無力・無能を見るばかりだったと思われる。古典の豊かな教養を政治の実践に取り

戻そうとしたのが、沈約と武帝の新貴族主義だったが、それが全く機能しない現実を眼のあたりにし、庾信の苦悩は深かっただろう。こうしている間にも、西魏の南侵の危機は刻々と迫ってくる。その不安を庾信は、

亡呉之歲既窮

亡呉の歲

既に窮まり

入郢之年斯盡

入郢の年

斯に尽く

（哀江南賦 一五一・二）

と歌っている。ここも『左伝』を意識する。前句は、昭公三十二年に、晉の史墨が予言し、「越に歳星（木星）が回つてから、呉が伐てば、呉はその禍に当たり滅ぶだろう」といったことを、また後句は、同三十一年に、やはり史墨が夢占いをし、呉が郢を攻撃して来ると述べたことを指す。庾信はこれらの予言を借り、梁が西魏の侵寇を受け、滅亡の危機に瀕していることを指摘するのである。

もはやこれ以上の逡巡は許されぬ。庾信は迫いつめられたような心境

の中で、西魏の侵略を回避すべく、自から西魏への和議の使者となることを提案したのではなかったか。承聖三（五五四）年秋、庾信は命を奉じて江陵を辞し、西魏へと向かう。

辭洞庭兮落木

洞庭を落木に辞し

去潯陽兮極浦

潯陽を極かな浦より去る

（哀江南賦 一五七・三）

が、庾信の西魏入りとちやうど入れ替わりに、西魏が江陵を陥落し、庾信はそのまま北朝に囚われの身となる。「哀江南賦」序に、「華陽（江陵）より奔命し、去る有りて帰る無し。中興遂に銷え、甲戌（承聖三年）に窮まる。三日都亭に哭し、三年別館に囚わる」（九四・一〇二）と記すのがそれである。庾信はこれをもって、南朝三百年の終焉と感ずるのだった。「將に江表の王氣は、三百年に終るに非ざらんか。」（哀江南賦序 一〇一・三〇四）

中国では、昔から君主が天意に反すると、まず災を下し、それでも改めないと異を下し、それでもなお改めなければ、ついには国を滅ぼすといわれている。今、「哀江南賦」を仔細に読むと、歴史の節目ごとに、その天の予兆ともいふべき異常現象が記されていることに気づかされる。まず、梁朝倒壊の最初の大きな契機となる、侯景帰順の容認は太清元年だが、この時は、

非玉燭之能調

玉燭の能く調うに非ず

豈璿璣之可正

豈に璿璣の正しうす可からん

（一一七・二）

と、四時の氣象が諧わず、天文観測器（璿璣）もこれを正せなかったという。また、侯景が都に迫つたのは太清二年だが、この時には、

地則石鼓鳴山

地には則ち石鼓山に鳴り

天則金精動宿

天には則ち金精宿に動く

北闕龍吟 北闕には龍吟じ
東陵麟鬪 東陵には麟鬪う

(中略)

白虹貫日 白虹は日を貫き
蒼鷹擊殿 蒼鷹は殿を撃つ

(一二〇・二五)

と様々な異変があったことを記す。右の最後の二句は、『南史』巻七武帝下に、「太清元年…二月己卯、白虹貫日。…三年春正月…庚申、白虹貫日三重」と録するのに対応する。これは古来、君に危険の及ぶ兵象とされる。そして承聖三年十一月に、岳陽王蕭詧と結んだ西魏軍が江陵を陥落、元帝も殺されるが、この時の数々の予兆を庾信は、

沴氣朝浮 沴氣 朝に浮かび
妖精夜隕 妖精 夜に隕つ
赤烏則三朝夾日 赤烏 則ち三朝日を夾み
蒼雲則七重圍軫 蒼雲 則ち七重に軫を囲む

(一五一・一二)

直虹朝映壘 直虹 朝に壘に映じ
長星夜落宮 長星 夜に宮に落つ

(擬詠懷詩 其十一)

鬪麟能食日 鬪麟 能く日を食らい
戰水定驚龍 戰水 定めて龍を驚かす

(同 其二十三)

と歌う。

古えの中国人は、これらの異変を、天の地上の世界に対する警告として受け止めていた。庾信も鋭敏な感覚で、絶えずその微かなメッセージに耳を傾け、国家の行末を深く案じ続けていたに違いない。建康陥落の

折には、「競いて天関を動かし、争いて地軸を迴らす」(哀江南賦 一三三・二)というように、これが梁の滅亡を即意味するのではなく、人間の側の努力次第では、なおも解決しうる余地のないわけではないことを示唆している。即ち、庾信は、人間の側で無闇に天地の基軸を動揺させるような愚かな行為を即刻中止し、以前の平和な状態に復するよう努力してゆけば、梁の復興は可能だと考えていただろう。にもかかわらず、梁は、既に見てきたように、天道より逸脱すること愈々甚しく、放縱の限りを尽くし、その滅亡を必然なものとしてゆくのである。

侯景の帰順以来、七年間の間、危機に瀕した祖国の山河の呻吟を、わが身のことに憂え、懸命に政治倫理や社会の正常な状態の回復を念願し続けてきた庾信だが、ついに国家の崩壊の時が来た。その衝撃の大きさは、彼の詩賦に幾度も綴られている。

① 嗚呼、山嶽崩れ頽るるは、既に危亡の運を履む。(哀江南賦序 一〇一・四〇五)

② 水木交^{まじ}りも運り、山川崩れ竭く。(哀江南賦 一〇六・二)

③ 奔河地維を絶ち、折柱天角を傾く。(和張侍中述懷)

④ 遂に乃ち山崩れ川竭き、冰砕け瓦裂く。(小園賦)

①④は、柳宗元の「三川震」に引かれることで知られるが、『国語』周語上で、伯陽甫が周の滅亡を予言する言葉、「夫れ国は必ず山川に依る。山崩れ川竭くは亡国の徴なり」(『史記』周本紀にも同様の文あり)を踏まえる。②は、王朝の交替を、水木といった五行思想にあてはめた見方。

③は、『淮南子』『列子』等に記す、有名な共工氏による天地崩壊の神話を意識する。国家の滅亡を、永遠なるものの象徴である、この山川や天地の崩壊をもって喩える表現に、庾信の強い衝撃の程を読み取ることができる。

このような庾信の深刻な言葉を見ると、一つの疑問が湧いてくる。

従来までの南朝の貴族達は、一般的に国家の滅亡を、それほどわが身のことのように嘆き悲しまなかったはずである。周知のように、当時は国家の命運と貴族のそれとは全く別個に考えられており、この種の文学は久しく起り得なかったのである。それなのに、なぜ今、庾信にこのような文学作品が生まれてきたのだろうか。その理由を考えてみるに、まず第一に、梁の国家体制上、前代までと根本的に異なる点のあることを指摘せねばならない。即ち、梁はそれまでの王朝の短命や支配構造の脆弱さに学び、皇帝と貴族の一枚岩的な体制を再構築したわけだが、ために貴族にとっては、自身のこれ以上の地盤沈下をくい止めるのに有益な反面、これまで避けて通ることのできた国家との危険な関係を、再び開始することになったのである。次に、庾信個人のことを考えるに、庾信は右の体制のシンボリック的存在として、輝かしい栄光を放ち、皇室の恩寵を深く被った人物である。したがって、梁の滅亡は、彼にとっては、誰よりも深く切実な、いわば同根の痛みをもって映じてくるものなのである。加うるに、その愛する祖国が、南朝のこれまでの興亡のように、江南人の誰かによって取って代わられたのではなく、この三百年もの長い間、互いにしのぎを削ってきた仇敵の異朝によって滅亡に追いやられ、しかも江南貴族の系譜が完全に途絶えた結果、事実上江南の貴族制社会は終焉するに至った、という事の重大さがあって、庾信の衝撃は二重にも三重にも深いものとならざるを得なかったのである。

庾信自身、「ああ、山嶽の崩れ落ちるは、すでに定まった滅びの運命の結果なのだ」（哀江南賦序）と述べるように、梁の滅亡は今や天命であった。もし天命として定まっているものならば、個人の力では如何ともしがたい。しかし、それが避けられぬ運命とはいえ、彼の悲歎は止みようもなかった。いな、祖国の地への思いはますます募っていったことだろう。しかし、天は無情にも、その庾信から決定的なものを奪い取っ

た。即ち、祖国の地であって、直接自身の手で、新しい祖国を再建する望みを。庾信は今、祖国を滅ぼした西魏に囚われの身であった。彼は遠い異境にあって、孤独感にさいなまれながら、祖国再建の夢を、地平線の彼方の空に空しく描かなければならないのである。ここに、傷まじき江南哀史に、もう一つ悲しき望郷の歌が深く絡んでくる、根本的な理由があると思われる。庾信の叫びは痛切である。「天意よ、人事よ、以って（わが）傷心を凄惨たらしむべき者なり」（哀江南賦序 一〇一・五〇六）。

六 「哀江南賦」に関する問題点

最後に、従来までの「哀江南賦」をめぐる幾つかの議論について、筆者なりの考察を加えてみたい。これまでの主な議論点は、その叙述態度・制作時期、及び『北周』庾信伝に、「郷関の思いを（哀江南賦）に歌った」というにもかかわらず、その賦が「必ずしも望郷の念を感傷的に歌い上げてはいない」（小尾博士）¹⁰⁶というこのギャップの解釈等であろう。これらの問題を考えてゆくと、各々の要素が複雑に絡んでくるが、ともかく順を追って考察してゆくこととする。

まず、その叙述態度だが、小尾博士は「賦のこの叙述のしかたは、記録者の態度であって、著述者の感情の投影は見られない。一体（江南を哀しむ賦）は、記録者の態度をもって書かれているといってもよい。」と述べられた。これは「哀江南賦」が、その題名からして極めて感傷的な内容を予想させやすいが、実際にはむしろ冷静さに包まれた記録文学的であることを洞察されたもので、「哀江南賦」の重要な特徴の一つだといえる。既に見てきたように、庾信は、賦の本文において、梁の滅亡の過程を逐一叙し、客観的に描くことに心を砕いている。したがって「哀江南賦」の「哀」も、作者の個人的な感情を伝える所に主眼があるわけ

ではなく、むしろこの傷ましき歴史自体があるがまさに現前化させ、歴史自体に語らせることで、この時代に起こった悲劇の総体を、後世に伝えんとしたのだと思われる。また、客観的な「記録者の態度」であるが、これは祖国や君主への庾信の不人情を示すものだ、という見方もあるが、私にはむしろ、本論中でしばしば言及したように、梁への深い愛情、及びその同根の傷みの故に、梁の滅亡の真因を冷静かつ私心を排して探り出し、それを次代への歴史の鑑として残すことを自らの責務として受けとめたがための、強い自己規制的態度を意味するように思われる。『左伝』『史記』等に多く出典を求め、またその叙述態度に学ばんとしたのも、可能な限り厳正な史家としての目で、梁の顛末を綴らんとしたからにはかなるまい。

さらに「哀江南賦」における、庾信の「自分本位」の叙述についてであるが、小尾博士は「要するに、この賦は、…自分本位に語った自伝と考えてよからう」と述べられる。また、かつて中国の潘辰氏も、同様のことを指摘された。⁹⁷これらの「自分本位」論の全体をみると、問題点もあると思われるが（例えば、前述した庾信の不人情の著述態度など）、この「自分本位」自体は、多少意味は異なるが、「哀江南賦」の隠れた本質としてあることを否定できないように思う。動乱の中で己の抛るべき基盤を、根こそぎ喪失した庾信の状況を考えた時、彼が心の中で、梁朝史における自分史を再構成し、改めて自己を確認した上で、今後の自身の可能性を探るのは当然のことと思われる。膨大な中国の古典を一挙に集約した感のある、長編の「哀江南賦」を構想しつつ、庾信は時に絶望感や屈辱感に襲われながら、懸命に自己を支え、また激動下で自己を見失わぬために、否、もっと積極的に自己を見つめるために、この作品の筆を取ったことだろう。即ち、「哀江南賦」を綴ることは、取りも直さず、自己の新たな確立の上で不可欠な意味を持っていた、と考えられる。この庾

信の深い自己凝視の姿勢が、以後の庾信文学に、当時にあつては稀なほど強いことは、別稿において述べた彼の「知余」表現に、端的に伺えるように思われる。⁹⁸客観的な江南哀史を書くことが、自己の新たな模索と関わっているがゆえに、両者は本来一応別の次元にあるのに、いつか一つに混同視されやすい。自己のための叙述は、作品の表というよりも、裏において最も重要な意味をもっていた、というべきではないだろうか。なお、「哀江南賦」が、「自分本位」の自伝と見難いことは、第三・五章中に既に見てきた通りである。

しかし、右の私の見方は、従来の考えからすれば、少なからず異論ありと駁されるであろう。なぜならば、「哀江南賦」が自己確認や、自己再生の可能性の模索の意図をも含むとなれば、その制作時期を、北遷後間もなくの頃に置かねばならなくなり、最晩年の作という従来の定説と合致しなくなるからである。が、この定説にも、疑問がないではない。ごく素朴な感想としてでも、この「哀江南賦」の一一の事件の克明な記録への執念と、またそれを厳正に賞罰せんとする庾信の心の奥にある、邪悪・不正なものへの激しい憎悪と怨念、あるいは、修辭的技巧の面でも、賦の隅々にまで四六文・対仗・押韻・典故等を、完璧なまでに装い尽くさんとする精力的な構想力と意志力、さらに、祖国の滅亡を天地自然の崩壊に喩え、自己の運命に沈痛な叫びをあげるなどの強い衝撃を物語る表現等々が、その後二十年以上も北朝の顯貴となり、帝室の盛んな聖恩を被り、やがて人生を閉じんとする人間から、はたして奔り出てくるものなのかどうか。また、本章の冒頭で言及したように、「江南を哀しむ賦」であるのに、望郷の情が余りにも少ない、というのも大きな疑問である。では、これまで北遷後まもなくの頃の作と考えた先人はという、僅かに網祐次氏と、最近注目すべき新説を出された中国の魯同群氏ぐらいしか見出し出せない。⁹⁹網氏はその根拠を掲げられていないが、魯

同群氏の方はかなり詳細で、きわめて説得力に富むと思われる。よって魯氏の見解をもとに、改めて最晩年説の問題点を検討してみることしたい。

「哀江南賦」晩年説は、陳寅恪氏の考証を軸に、それを展開させる形で、今日に至っていると見てよからう。今、その要点を列記すれば、陳氏は、①「哀江南賦」序に、「天道周星し、物極まりて反らず」とある所より、もし梁滅亡後、「歳星」(土星のこと。但し原文は「星」とのみいう)が一周した時とすれば、北周の武帝の天和元(五六六)年、庾信五十三才の時になり、二周めならば、武帝の宣政元(五七八)年、信六十五才の時となる、と推定する。②しかし、賦の末尾の一段には、「況んや復た零落し將に尽きんとし、靈光の巋然たるをや」とあり、周囲の人々がほとんど死没し、己のみ取り残された、と歌われる。とすると、信五十三才の時では王褒も逝ってはならず、これは取り難い。もし六十五才の時ならば、褒も卒しており、さらに「危慮に逼迫し、暮齒に端憂す」という賦末尾の表現とも合致する。③また、右句の後に続く「長樂(長安の宮名)の神皋(皇宮)を踐み、宣平(長安の門名)の貴里を望む」という、北朝の顯貴との交わりについても、庾信は晩年に驃騎大將軍・開府儀同三司になっており、これと対応する。④以上に加えて、同じ箇所「日は紀に窮まり、歳は將に復た始まらんとす」の表現があるのを考えるならば、大約宣政元(五七八)年の十二月頃に、「哀江南賦」は書かれたと推測される。このような綿密な説明の上に、これまで「哀江南賦」晩年説は支持されてきたように思われる。

これに対し、新説を出された魯同群氏は、①については全く言及されない。そこで氏の論全体を見直しながら、そのことの意味を斟酌してみると、魯氏はおそらく「天道周星」の解釈を、土星の十二年の周期とは取らないのである。そうではなく、たとえば『礼記』月令に、「季冬之

月、日窮于次、月窮于紀、星回于天、数将幾終、歳且更始」(十三経注疏)といい、『淮南子』卷五時則篇に、「季冬之月、日窮于次、月窮于紀、星回于天、歳将更始」(四部叢刊)というように、一年の星座めぐり終えることと見ているようである。したがって魯氏は、この部分を、制作年代推定の重要な資料とは見なさない。これは従来の陳氏の立場と大きく異なる点である。『礼記』『淮南子』の用例もあり、「周星」を「歳星の周期」と断すべき理由は必ずしもないように思われる。

次に②について、魯氏は「況復零落將尽」の前の部分を考慮される。それは、「余が烈祖(八世の祖、庾滔)西晉において、始めて東川(江陵)に流播す。余が身に泊びて七葉、又た時に遭いて北遷す。老幼を提挈え、閔河に年を累ぬ。死生契闊、天に問うべからず。況んや復た零落し……」となっており、その脚韻を見ると、川・遷・年・天・然と同一の韻を踏み、この下句より換韻している所から、この部分は一つの段落として、一つのまとまった内容を有する構成になっていることが分かる。その内容を見ると、庾滔より庾信に至る八代の庾氏の南遷、そしてまた北遷という苦難の歴史を振り返り、次に、異境に家族とともに移り、生死の定かならぬ不安な日々を送っていることを歌う。そして問題の「況復」の二字へと続くわけだが、緊密に上文を受けた接続であり、ここに突如王褒などの知人の死を挿入するのは不自然である。ここはやはり庾信一族のことを通して話題にしている、と考えた方が穏当だろう。したがって、「零落し將に尽く」は、「傷心賦」に歌われる二男一女・成人した一女・一外孫等を指すのではないかと、説かれるのである。従来の倪璠注、譚・紀注等の、常識的な解釈に基づいた「知己の死」説を、改めて問い直す鋭い指摘である。また「暮齒」についても、この語彙で「哀江南賦」Ⅱ晩年説を主張するのは、根拠不十分だとされる。そして古えの中国の文人は、しばしば壮年期にあっても、嘆老の詩文を書いたとして、曹丕

が三十余才で「老翁」と自称した例（与呉質書）や、「神滅論」の著者范縝が二十九才で、「傷暮詩」「白髮詠」をなした例（『南史』卷五十七范縝伝）を示される。なお補足すれば、三十を過ぎたばかりの謝朓が、「鏡を開きて衰容を眺む」（移病還園示親属）や、「爾うして乃ち眷（わん）に薄暮に言い、南に眺めて悠然たり」（思婦賦）と述べたことなども想起される。この謝朓の異常な衰老の感覚は、興膳宏氏によれば、彼の鋭敏な感受性が内に向かって深く沈潜し、そのベシズムな世界で己の憂愁を抒情詩化した、いわば彼の詩の典型なのだ、とされる。このことは、衰老が極めて主観的に意識されやすいものであることを物語っている。庾信の場合も右の例と同様で、魯氏も指摘されるように、梁末の動乱・異国での羈留が、庾信をしてかくも深き嘆老の感慨に至らしめたのだ、と考えられる。したがって、年令的に必ず五六十年代でなければならぬ、というものではない。

さらに③についてであるが、庾信は通常北周朝にあつて顕貴になったかのように思われているが、魯氏はここでもこの常識をくつがえす。即ち、庾信は西魏時代に、はや車騎大將軍・儀同三司の高官（庾信四十二才）に昇っている点を強調されるのである。以上のように見てくると、陳氏の所説の一つ一つは、決して確定的なものではないことが理解されよう。むしろ常識なるものに牽引され、漠然と晩年の作を想定した節があり、それに向かう形で個々の説が並べられている観がある。

さて、ここまでの所、魯同群氏は、「哀江南賦」の制作年代を推定しうる有力な資料を掲げていない。魯氏の所論の中で、とりわけ重要なのは次の二点である。まずその一つは、賦の末尾に、「有嬀の後（陳霸先を指す）は、將に姜（梁のこと）に育まれんとす。我が神器を輸し、居りて王を讓るを為す」とある部分である。これは太平二（五五七）年十月に、梁の敬帝が陳の武帝に位を讓ったことをいうが、魯氏はここに制作年代

を推定する一つの鍵がある、とみる。つまり、庾信は「哀江南賦」で梁一代の盛衰史を詠じようとしているのに、この敬帝がその翌年の四月に害されたことには言及していないのである。ちなみに庾信は、「擬詠懷詩」其六では、敬帝の死を漢帝の劉孺子の史実を踏まえ、「悲傷たり劉孺子 懷愴たり史皇孫」と歌っている。魯同群氏はこの間の事情を斟酌し、敬帝の死に言及しなかったのではなく、おそらくまだその事態に至っていないからだ、と考えられた。

さらにもう一つの重要な資料とは、やはり賦の末尾にいう、「幕府の大將軍は之れ客を愛し、丞相の平津侯は之れ士を待つ」の部分である。従来、ここは倪注でも譚・紀注でも、庾信が北周の明帝・武帝等より寵愛を受けしことをいう、とごく簡単に解されてきた所である。ところが魯氏は、長きにわたり盛んな恩寵を忝けなくした北周の兩皇帝を、その即位前の「大將軍」で呼ばれることを強く疑問視され（「丞相の平津侯」は、兩皇帝の陰の後見人である晉公宇文護を指す）、試みに庾信の他の詩文を調査された。その結果、「答趙王啓」に、「信学ばず術無く、本分は泥沈なるも、忽ち天造（武帝のこと）に逢い、仄陋（卑しき身）より搜揚（搜し出して登用すること）され、今は遂に憲司（司憲中大夫）を總べ、刊鼎（趙王の功を刻んだ鐘鼎）を聞くに預る」（武帝の建德五（五七六）年、庾信六十四才の作）魯氏の推定による」といい、「奉報寄洛州」詩に、「無庸（凡庸）なるに天、睠（武帝を指す）を奉じ、伝を驅し南秦を牧す」（庾信が洛州刺史になった時の作。建德六年、信六十五才。）というように、庾信が武帝に対し最高の敬意表現をしている点を確認された。魯氏はこれをもとに、「哀江南賦」がなぜ、敢えて「大將軍」と貶した言い方をするのか、合点がいかぬと主張する。とすると、「哀江南賦」は、明帝・武帝の即位前に書かれたのではないか。明帝が大將軍となったのが、西魏の恭帝の三（五五六）年、そして帝位に登ったのが、五五七年九月である。また、武帝

が大將軍を拜したのが、五五七年一月、帝位に即いたのが、五六〇年である。一方、「哀江南賦」は、五五七年十月の梁の敬帝の禪讓までを記するから、明帝の即位前というのと矛盾することになる。これについて魯氏は、庾信が明帝の格別の恩顧を被るようになったのは、五六〇年に麟趾殿校書に挙げられてより以後であり、五五七年の段階では、西魏より北周に交替したばかりで、明帝とはさほど親しくなかったがために、「大將軍」と呼んだのだろうと推測される。

以上の魯氏の説は、「哀江南賦」の作品内容からのみ、その制作年代を推定しようとしたものである。じつはこれには、『周書』や『北史』の庾信伝の最後尾にいう、「信、位望通顯すと雖も、常に郷関の思い、有り（を作し）、乃ち哀江南賦を作りて、以ってその意を致す」の一文が、庾信伝の最晩年に置かれていることや、望郷の情に言及することの故に、作品の外から制作年代を規定してしまいがちだという背景があつて、今、この一文を仮りに外して、純粹に内容のみで検討してみようとしたのだと思われる。その分析を通して、作品自体としては、右に見てきたような諸点、及び望郷の情を歌う詩句も他の作品に比し、あまり詠嘆的ではないなどの理由から、おそらく北遷後間もなくの時期と見た方が自然だろう、という推論を得るに至ったわけである。これらの史書の一文は、思うに大約の常識的見解として、最晩年の作と見なしていた可能性がある。魯同群氏の推定年代は、五五七年十二月、庾信四十五才の時ということだが、私にはこの見方の方が種々の点で無理がないように思われる。このように考えてくるならば、なぜ庾信が江南哀史の裏面で、自分史を綴らねばならなかったのか。また、なぜ「哀江南賦」が「必ずしも望郷の念を感激的に取り上げてはいない」のか、等の疑問も自から明らかになってこよう。即ち、前者は、庾信がその序に「三年別館に囚わる」というように、自身を囚われ中の身だと厳しく認識する中で、懸命に自

己確認と自己の可能性の模索を測らねばならなかったが故なのであり、後者は、まだこの時期では明確に帰国の可能性が消えてはいないが故なのだ、と思われる。さらに私が前に取り上げた、普遍的な芸術作品たらしめんとする庾信の異常なまでの執念や、また梁朝を滅亡に追いやった者への激しい憎悪と、厳潔な賞罰的態度なども含めて、このような情念を噴出させている深い断層は、やはり、華やかな栄光の詩人から無惨な転落を経過した直後の、北遷後まもなくの作と見るのが最も相応しいように思われる。

おわりに

論文の構成上、年代を追って作品を掲げながら、そのつど問題を取り上げるといふ体裁を取ってきたため、聊か考察が途切れがちとなつてしまった。ここで本論の全体を通覧し、主要な論点を整理しておきたい。

①栄光の時期にあつて、庾信は「宮体詩」の文学Ⅱ艶麗な詩文に心をすっかり埋没させていたわけではなく、その一方で堅実に幅広い分野に亘り、特に『左伝』を深く修めていたと考えられる。このような梁朝随一ともいえる豊かな古典の基礎の上に、梁末の衝撃的な政変の全体を、適確かつ華麗な修辞をもって、生々しく描き上げることが可能になったのだと思われる。さらに、当時の梁の行き詰まりつつある政治状況と、その主翼を担う宮廷文人の行動とを併せ考えてみるに、この「宮体詩」は、従来のように純粹な文学論の領域のみでは、十全に解釈できないものがあるように思われる。この頃の庾信の文学活動は、深い部分で何がしかの政治的配慮を持ってなされたものではあるまいか。

②梁末の治世の混乱下にあつて、庾信は文学意識の転換を迫られ、徐々に「宮体詩」風の文学の限界を覚つていったと考えられる。中でも重要な体験となつたのは、当時の梁の置かれている政治状況の厳しさを、

直接体全体で痛感したという意味で、彼自身東魏の外交使節に任じられたことであつたらう。また、彼の文学的転換をさらに進めることになつたと考えられるのが、この時期活発化してきた北朝との外交往来の中で、庾信がいつの頃から、北魏末の政変下の悲哀を重々しく綴った、李諧の「述身賦」や李騫の「积情賦」に接し、敵国の文学ながら深い真実感の籠った作品として、心に留めた可能性のあることである。これは近年アメリカのグラハム氏が指摘されたものだが、氏の説を補強する幾つかの論拠があり、庾信がこの二作品の叙述・テーマなどを意識し、後に「哀江南賦」においてそれをさらに発展させたということは、十分に考えられる所であらう。

③次に、「哀江南賦」に描かれた梁末の政変を通して、そこにどのような庾信の叙述態度が反映されているかということだが、まず第一に、『左伝』の深い造詣から発する、政治倫理の腐敗に対する厳しい批判のあること。第二に、父・庾肩吾の遺言でもあるが、天地の分裂を再統一するには、まず正確な梁史の叙述をせねばならない、という自己を司馬遷に比擬した強い使命感のあったこと、等が指摘される。さらには、何よりも庾信の梁朝への深い愛情の故に、彼がその悲劇を重い同根の痛みをもって見つめていたという、いわば内発的感情の存在も忘れてはならない。このような基本的態度の下に、この動乱の一部始終が克明、かつ客観的に叙述され、その上に厳正な史家の批評眼による賞罰が下されているのである。

④梁末の動乱は、いわば六朝貴族体制の行き詰まりを自証する歴史のうねりとして捉えられているが、この歴史の趨勢に否定された貴族体制の一員として、庾信は当然のごとく自己の再確認と、また再確立を懸念にはかろうとしたに違いない。「哀江南賦」の制作の背景には、このような歴史と個人との激しい葛藤的側面があつたと考えられる。それが「哀

江南賦」の裏面で、自分史を綴らずにはおれなかった根本理由なのではないか。このほか、国家の悲劇をわが身のことにように慟哭する「哀江南賦」は、政治から距離を置く、従来の南朝の一般的な貴族文学とは全く異質であるが、この時期にこのような作品が出現し得た理由について。また、「哀江南賦」の制作年代は、従来最晩年説がほぼ定説だったが、魯同群氏の近年の論文によると、この見解にも幾つかの疑問があり、むしろ北遷後まもなくの頃と見た方が自然ではないか、等々の諸点についても付言した。

以上、梁朝社会下の庾信の行跡とその文学の全体像を、筆者なりに捉えてみるべく試みてきた。が、問題が多岐に亘っている上に、資料的制約もあつて、浅い理解のままに推断を多く下してきたように感じられる。これらの筆者の試論には、不十分な点や誤解が少なからずあるに相違ない。大方の御批正を心よりお願いし、また後日を期したく思う次第である。

注

- (1) 興膳宏氏『庾信』(集英社⁸³)
- (2) テキストには、清・倪璠注『庾子山集注』(許逸民校点、中華書局⁸⁰)を用いた。また、本稿所引の「哀江南賦」には、右の頁数・行数(例、一一一・一一二)を付した。
- (3) 本稿所引の正史の記述は、すべて中華書局版による。
- (4) 宮崎市貞氏『九品官人法の研究』(同朋舎⁵⁶)の、「学館と試験制度」を参照。
- (5) 川勝義雄氏『六朝貴族制社会の研究』(岩波書店⁸²)の、「貨幣経済の進展と侯景の乱」(初出は、「侯景の乱と南朝の貨幣経済」として、『東方学報』

第三二冊⁶²に発表)を参照。

(6) 興膳宏氏「玉台新詠成立考」(『東方学』第六十三輯⁸²)を参照。

(7) 簡文帝の文学を、「放蕩の文学」として論じた代表的なものには、林田慎之助氏「南朝文学放蕩論の美意識」(『中国中世文学評論史』創文社⁷⁹)や、鄧仕梁氏「釈へ放蕩」兼論六朝文風」(『中国文学報』第三十五冊⁸³)がある。これらはいずれも「立身」・「謹重」と「放蕩」との対立を、文学論的な立場から論じたものである。

林田氏によれば、「(簡文帝は)自己の生活信条及び実践行為と文章表現とは無縁であり、切り離して考え」ていた、と解される。しかし、武帝の厳しい叱責を受けたことや、またかの「答徐摘書」におけるように、簡文帝が政治に対し、極めて謹厳な姿勢で臨んでいること等を改めて想起するに、政治と無縁な文学という方針は、作品を見る限りではそうだったといえるとしても、作られたその場の情況がどうだったのか分からないし、一人の人間の中でこの分離をどこまで明確に貫徹していたのか、疑問な点もある。

また、鄧氏の解では、「放蕩」を、規範に拘泥されずに文学的に新しい価値を創造せんとする芸術的方法という視点で捉え、「六朝全体が放蕩の文学だった」と述べられる。しかし、梁の貴族の艶情詩に、武帝の懸念するような遊蕩的な気分が少なからずあるのは事実である。試みに、簡文帝の重要な側近で、『玉台新詠』にも数首作品が収録されている張率の「日出東南隅行」(『全梁詩』巻七)や、劉遵の「応令詠舞」(同 巻十一)を読むに、深味のある芸術といえるのか、問題であろう。

「輕艶に傷る宮体詩」(『梁書』簡文帝本紀)、及び『玉台新詠』が、最終的には武帝の承認・納得の下に推進し得たであろうこと、さらに矛盾の目立ち始めた当時の政治状況を視野に入れて検討すると、「宮体詩」「放蕩の文学」は、どこかの時点で何らかの政治的意図を織り込むようになったのではないか、と思われてならない。

(8) 安田二郎氏「南朝の皇帝と貴族と豪族・土豪層」(『中国中世史研究』東海大学出版会⁷⁰)や宇都宮清吉氏「中国古代中世史把握のための一視角」(『中国古代中世史研究』創文社⁷⁷)に詳しい。

(9) 前掲注(6)を参照。

(10) 越智重明氏「梁の武帝と貨幣流通」(『魏晉南朝の人と社会』研文出版⁸⁵)

を参照。

(11) 前掲注(1)の「東魏への使節」に詳しい。

(12) William T. Graham, JR. 'The Lament for the South' Yu Hsin's 'Ai Chiang-nan fu' (Cambridge Studies in Chinese History, Literature and Institutions, Cambridge University Press 80) P. 43

(13) 「哀江南賦」と「帰魂賦」との関係については、陳寅恪「讀哀江南賦」(『清华学报』十三卷一期 民国三十年)、また「觀我生賦」との関係については、周法高「顔之推觀我生賦與庾信哀江南賦之比較」(『大陸雜誌』第二十卷第二期⁶⁰)に言及がある。

(14) 侯景の乱については、吉川忠夫氏「侯景の乱始末記—南朝貴族社会の命運—」(中公新書⁷⁴)が詳しく、本稿も多くその恩恵を蒙った。

(15) 前掲注(8)を参照。

(16) 小尾郊一氏「庾信の人と文学—〈江南を哀しむ賦〉を中心として」(『広島大学文学部紀要』23-3⁶⁴)

(17) 潘辰「讀《庾信詩賦選》」(『光明日報』一九五八・九・二八、文学遺産二二八期)に、「庾信写、哀江南賦」主要是抒發自己的故国之思、并不是写梁朝的興亡史、雖然涉及梁的興亡、也只是通過自己的感受写出一些現象。」と述べられる。

(18) 拙稿「成都期の杜詩と庾信文学」(『日本中国学会報』第三十七集⁸⁵)の一・二三頁を参照。

(19) 網祐次氏「庾信について 二」(『二松学舎大学論集』昭38年度)の一五頁、魯同群氏「庾信入北仕歴及其主要作品的寫作年代」(『文史』第十九輯 中華書局⁸³)の一四八—一四九頁を参照。

(20) 前掲注(13)を参照。

(21) 倪瑞注「庾子山集注」(注(2)、譚正璧・紀馥華選註『庾信詩賦選』(古典文学出版社⁵⁸))

(22) 興膳宏氏「謝朓詩の抒情」(『東方学』第三十九輯⁷⁰)を参照。

(昭和六十一年十月十一日 受理)